
遊戯王5D's マギカ

ベガF91

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's マギカ

【Nコード】

N4574Q

【作者名】

ベガF91

【あらすじ】

ゾーンとの戦いを終え、平和にくらしていた不動遊星。しかしある日夢でキュウベえと出会い、まどか達、魔法少女とともに魔女と戦うことに...！遊戯王5D'sとまどか マギカのクロスオーバー作品です。

第一話（前書き）

遊戯王とまどか マギカの二次作品です。ではどうぞ

第一話

「…ここは……」

ゾーンとの戦いを終え、ただ一人知らない場所にいた不動遊星は…

「…なんだこれは…!？」

遊星は知らない場所を見て、驚いた。まるで、以前アポリアが見せた仮の未来の世界のようだった。

「ん…？」

そこには一人の髪の長い女の子がなにかと戦っていた。

だがしかし、攻撃されて吹っ飛ばされた。

「いつたいなにが…？」

「彼女は戦ってるんだよ…。魔法少女として」

「!？」

遊星の隣には謎の白い生き物がいた。

「お前は…？」

「僕に力を貸してくれるかい？赤き竜のシグナー、不動遊星」

「！」

遊星は目を覚ました。どうやら今までののは全部夢のようだ。

そして、D・ホイールで走りながら、昨日見た夢のことを考えていた。

（あれはいつたいなんなんだ？それに…、あの子とあの生き物はいつたい…）

遊星は夢のことが気になって考えていた、その時だった…

助けて…！

「！？」

助けて……！

どこからか声が聞こえた。

「いつたい誰が！？」

それと同時に痣が光だし、その光は遊星とD・ホイールを飲み込んだ。

「……ここは…」

目をあけると、どこかの倉庫についた。

「ここは、ネオ・童実野シティなのか…?」

遊星が何がどうなってるか戸惑っていた。戸惑っている中…

「なんだ!?!」

倉庫のあたりがまるで迷宮のように変わっていった。

「これは、昨日夢で見たのと同じ…」

「まどか、これって夢だよね…? ねえ! まどか!」

すると、どこからか女の子の声が聞こえた。遊星が振り向くと白い綿のようなひげのはえた生き物が女の子二人を囲んでいた。

(まずい! このままでは…)

すると、痣とデッキが光りだした。

(これで戦えと…)

遊星は急いでデュエルディスクを装着し、デッキからカードを5枚ドロ―し、デッキからカードを一枚ドロ―した。

「【スピード・ウォリアー】を召喚!」

遊星がカードをディスクに置くと【スピード・ウォリアー】が出て

きた。

「いけ！【スピード・ウォリアー】！！」

【スピード・ウォリアー】は二人の女の子を囲んでいた生き物に攻撃し、一体撃破した。

「あれは…？」

「大丈夫か！？」

遊星はすぐに二人の女の子の元へかけよった。

「あ…はい…」

「あなたは…？」

「話は後だ！カードを一枚伏せる！」

遊星はディスクにカードを一枚伏せた。それと同時に生き物が【スピード・ウォリアー】に襲い掛かってきた。

「来る…！」

「^{トラップ}畏発動！【くず鉄のかかし】！」

遊星はすぐさま伏せたカード、【くず鉄のかかし】を発動させ、【スピード・ウォリアー】を守った。

「すごい…」

二人の女の子たちは遊星を見て不思議そうに見た。

「なんでカードから…?」

「この罌カードリリットは墓地にはいかず、そのままセットされる!」

【くず鉄のかかし】はディスクに再びセットされた。

(あの女の子の手に持っているあの生き物…、夢ででてきたやつだ…)

遊星はツインテールの女の子の手に持っている生き物が気になっていた。

(だが、まずはこの子達を守ることが先だ!)

カードを一枚ドローをし、

「チューナーモンスター、【ジャンク・シンクロン】を召喚!」

でてきたのは【ジャンク・シンクロン】だった。

「レベル2【スピード・ウォリアー】にレベル3【ジャンク・シンクロン】をチューニング!」

ジャンク・シンクロンは右腰のレバーを引き、背中エンジンを動かす。

ジャンク・シンクロンは三つの星から輪となり、スピード・ウォリ

アーがその輪に飛び込む。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！」

スピード・ウォリアーが二つの星となり、光の柱が現れる。

「シンクロ召喚！ 出でよ、【ジャンク・ウォリアー】――！」

光の中から現れたのは、遊星のエースモンスターの1体、【ジャンク・ウォリアー】

「し…シンクロ召喚…？」

青髪の女の子が少し驚いていた。

「行け、スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーは背中のブーストを放出し、多数の生き物たちを倒していった。

「すごい…」

「ほんとに、すごい力ね…」

と後ろから誰かがやってきた。

続く

第一話（後書き）

まだ、3話しか放送されてませんが（こちらの地区で…）話が進み
しだい、掲載していきます。

第二話（前書き）

今回はあの人が登場します。

第二話

誰かの声を聞き遊星たちが振り向いた。そこには金髪の女の子がやってきた。

「カードからモンスターに異^{トラッシュ}、そしてシンクロ召喚…。あなた、違う世界の人間ですね…。」

その言葉を聞き、遊星は少し驚いた。

（違う世界…？）

「あら、キュウベえを助けてくれたのね。ありがとう。その子は私の大切な友達なの」

（キュウベえ…。あの子が手にしてる生き物か…）

遊星はピンク髪の女の子が手にしているキュウベえの方をむいた。

「私、呼ばれたんです…。頭の中に直接この子の声が…」

ピンク髪の女の子の発言に遊星は驚いた。

「俺も、そつだ。」

「「ええ!?!」」

「俺もそいつの声を聞き、気がついたらここに…」

「なるほどね…、その制服あなたたちも見滝原の生徒みたいね。二年生？」

「あなたは…」

「！来る…！」

また再びあの生き物たちが集まってきた。それに反応し、遊星と【ジャンク・ウォリアー】は構えた。

「後は私にまかせて」

「何を！？」

「自己紹介の前に、ちょっとひと仕事…！」

そついいつつ、金髪の女の子は突然光につつまれ服が変わった。それを見て3人は驚いていた。

「はっ！」

その時、無数のピストルが出てきて、一気に砲撃をし多数の生き物たちを倒していった。

「すごい…」

「一瞬であんなものを…」

そして、あたりの空間が迷宮から元の倉庫に戻った。

「戻った…！」

「！【ジャンク・ウォリアー】が…」

それと同時に【ジャンク・ウォリアー】が消えていった。そのたん…

「！」

目の前に長い髪の女の子が現れた。

（あの子は夢で…）

「魔女はもう逃げたわ。しとめたいならすぐに追いかけてなさい。あなたにゆずってあげる。」

「私があるのは…」

「のみこみが悪いわね…。見逃してあげるっていつてるのに」

二人のやり取りを見て遊星は…

（仲間じゃないのか…？それに魔女とは…）

そう思いつつ、長い髪の女の子はその場を去った。その後、キュウベエの手当てを終え、キュウベエが起き上がった。

「ありがとう、マミ。助かったよ」

「おれはこの子たちに。私は通りかかったただけだから」

「どうもありがとう、僕の名前はキュウベえ」

「あなたが私を呼んだの？」

「そうだよ、鹿目まどか、それと美樹さやか、そして不動遊星」

「な…なんであたしたちの名前を？」

「俺もそうだ、夢の中でなぜシグナーだっけことも…」

「シグナー？」

シグナーと聞いてまどかとさやかは不思議そうな顔をした。

「僕は君たちにお願いがあってやってきたんだ。」

「お願い…？」

「僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ」

（魔法少女…？）

続く

第二話（後書き）

ちよつと変な終わり方になってしまいました…。次回も頑張つて更新していきます！

第三話（前書き）

アニメの2話に入る直前のお話です

第三話

遊星はキュウベえが自分のことを知ってることに不思議そうに金髪の女の子に聞いてみた。

「君はいつたい…」

「私はバマミ、見滝原中の3年生。そして、キュウベえと契約した魔法少女よ」

「あの…魔法少女って？」

青髪の女の子が疑問をいだきつつ質問をした。

「そのことに関して私の家に来て」

「わかった。だが、バイクを持って行っても構わないか？」

「ええ、構いません」

遊星はD・ホイールを押して、3人はバミに家を案内され家に着いた。

「さ、入って」

「「おじやまします」」

「ああ」

マミに誘われ、3人はマミの家に入った。

「素敵なお部屋…」

女の子2人は部屋の中を見て驚いた。

「一人暮らしだから遠慮しないで」

「一人で暮らしてるのか？」

「ええ。ちょっとお茶いれるから待ってて」

「はい」

「ああ」

3人はテーブルのそばに座った。マミがお茶の準備をしているところ2人の女の子が遊星に問いかけた。

「まだ私たちの自己紹介してませんでしたね。私は鹿目まどかです。」

「あたしは美樹さやか。まどかとはクラスメイトです」

「俺は不動遊星だ。よろしく、2人とも」

「はい、さっきは助けに来てありがとうございます」

「遊星さんが来てくれなかったら、あたしたちどうなってたことやら」

2人は遊星に礼儀正しくおじぎした。

「気にするな。困ったときはお互い様だろ？」

「いい人だなー。まどか」

「そうだね」

「それでまどか、君もキュウベえの声を聞いて」

「はい。私も遊星さんと同じく」

「さやかは？」

「いや、あたしは……」

「そうか」

「ところでさつき遊星さんが乗ってたあのバイクはなんですか？」

「さやかがD・ホイールのことを聞いてきた。」

「あれはD・ホイールと言って、俺の手作りなんだ」

「ええ！？自分で作ったんですか！？」

「ああ」

「さやかは驚き興奮した。」

「まどか、この人すごいよ！バイクも作って、かつこいいし！」

「さやかちゃん…、落ち着いて…」

「おまたせ」

ここでマミがケーキとお茶を持ってきて、テーブルの上に置き、おちゃにした。

「マミさん、すごくおいしいです」

「めっちゃうますよ」

「ありがとう、キュウベえに選ばれた以上、あなたたちも人事じゃないものね。ある程度の説明は必要かと…」

マミがそういつて遊星が言った。

「そうだな、俺の世界のこともいわなければな」

「うんうん、なんでも言ってくれたまえ」

「さやかちゃん…、それ逆…」

「うふふ…」

マミがあるものを3人に見せた。

「うわぁ、綺麗」

「それは？」

「これはソウルジェム、キユウベえが契約した女の子に与えられる宝石。魔力の源であり、魔法少女だってことの証よ」

「契約つて？」

とさやか言葉にキユウベえが答えた。

「僕は君たちの願い事をなんでもかなえてあげる」

「え！？ほんと？」

「願い事つて？」

「何だつて構わない。どんな奇跡だつておこしてあげられるよ」

「金銀財宝とか、不老不死とか、満漢全席とか！？」

「いや、最後のは……」

「でも、それと引き換えにできあがるのがソウルジェム、これを手にしたものは魔女と戦う指名が与えられるんだ」

「魔女……？」

キユウベえの言葉に遊星が疑問をだいた。

「なら、なぜお前は男である俺を導いた？」

「君の力を貸してほしくて、魔法少女と一緒に魔女と戦ってほしいんだ」

「俺の…力…」

「うん」

とマミが答えた。

「以前キュベえが話してた赤き竜のシグナー、不動遊星さん。キュベえがあなたの力を貸してほしくてあなたを導いたの」

「そうか…」

「ねえ、なんですか？その赤き竜のシグナーって？」

疑問をだいたさやかが質問した。

「ここからは俺の世界のことを話そう」

そういつて遊星は3人にデュエルモンスターズ、D・ホイール、モメント、そして五千年前の赤き竜と星の民の伝説を教えて、まどかとさやかは驚いた。

「そんな伝説があるんだ…」

「遊星さんはそのシグナーの竜持ドラゴンってるんですか？」

遊星はデッキから一枚カードを抜き取り、テーブルの上に置いた。

「これだ」

遊星のエースモンスターであり、長年ともに戦った竜、^{ドラゴン}【スターダスト・ドラゴン】だ。

「綺麗な竜……」^{ドラゴン}

「かつこいい……」

【スターダスト・ドラゴン】のカードを見てまどかとさやかは感動した。

「まだ他にも5体の竜がいる」^{ドラゴン}

「その5体は？」

「俺の仲間が持つてる」

「見てみたいな……」

「さやかちゃん……」

「そろそろ、私のお話進めていいかしら？」

「はい」

「どっぞどっぞ」

続
く

第三話（後書き）

ちよつと長くなつたなー…。まだマミのやりとりは次回も続きそうです。

第四話（前書き）

長らくお待たせしました…！前回のつづきです

第四話

さっそくさやかはキュウベえに魔女の事を聞いた。

「それで魔女ってなんなの？魔法少女とは違うの？」

「願いから生まれるのが魔法少女なら魔女は呪いから生まれた存在なんだ。魔法少女が希望をまきちらすように魔女は絶望をまきちらす。しかも普通の人間には見えないからたちが悪い。」

「理由がはつきりしない自殺や殺人事件などかなりの確立で魔女が原因なの。」

「そんなやばいやつらがいるのになんで誰も気づかないの？」

「魔女はつねに結界の奥に隠れひそんでるからね」

「俺たちがさまよってた迷宮のことか」

「そうだよ。」

「結構危ないところだったのよ。あれに飲み込まれた人間は普通いきて帰れないから」

すると、遊星は一枚のカードをだしてつぶやいた。

「じゃあ、俺があそこで【スピード・ウォリアー】や【ジャンク・シンクロン】を召喚できたのは……」

「魔女の力の影響だよ。だから君のモンスターたちは実体化したんだ」

「なるほどな…」

「ここでさやかが…」

「でも、なんでキュウベえは遊星さんを導いたの？」

「彼はかつて絶望から世界を救ったからだよ」

「世界を！？遊星さんが！？」

「すごい…」

キュウベえの言葉を聞いてまどかとさやかは驚いた。

「いや、それほどでもないが…」

「だから遊星、君の力をかして欲しいんだ。絶望をのりきった君なら…」

「キュウベえ…」

「それに、あなたたちはキュウベえに選ばれて願いをかなえるチャンスがある。でもそれは死となりあわせなの」

「悩むな…」

マミの言葉を受け、まどかとさやかは悩んで、ここでマミが2人に

言った。

「そこで提案なんだけど、2人とも私の魔女退治につきあってみな
い？」

「「ええ!？」」

「魔女との戦いがどういうものなのか、その目で確かめもらいたい。
その上で危険をおかしてまでかなえないゆめがあるかどうか…」

そしてマミは遊星の方をむいた。

「そして、遊星さんは私とともに魔女退治をお願いできるかしら？」

「俺が魔女を？」

「ええ。キュウベえに導かれた人ですし、その力で魔女を退治して
ほしいの」

「…ああ、もうこれ以上、人々を絶望なんてさせたくないしな」

「決まりね。そして2人は…？」

その時、2人は…

「私もマミさんと遊星さんの戦い見てみようかな…」

「じゃあ、あたしも!」

「決まりね」

こうして遊星と魔法少女たちによる魔女退治が始まる…！

続く

第四話（後書き）

終わりがちよつとむりやりですみません…！てか、いつになつたら魔女退治はじまるんだー！？って言っても6 7話あたりで魔女退治始まりますね…。

第五話（前書き）

大変遅くなってすみません！ここからはアニメ2話のお話スタートです！

第五話

その後、遊星はマミの家に住むことになり、キュウベえはまどかの家に住むことになった。

早朝、マミの家でマミは目を覚まし、台所の方を見ると

「あら、遊星さん」

「ああ、マミ。おはよう。」

「おはようございます。朝食を作っていましたの？」

「居候の身だからこれぐらいしか出来ないけどな」

といってテーブルの上に朝食を置いた。

「あら、料理ができる男性は女の子にもてますよ」

「そうか？」

こんな感じで会話が進んだ。

「これ弁当だ」

「ありがとうございます。遊星さんはこれからどちらへ？」

「これから職を探してくる。このままなにもしないわけにもいかな
いしな」

「遊星さん働き者ね。それじゃ、いつてきます」

「ああ、気をつけてな」

2人は家を出て、マミは見滝原中学校へ、遊星は職探しへと街に行った。

そして見滝原中学校では…

「おはよー」

「おはようございます」

「おはよ…げっ！」

「おはよ、さやか」

とまどかが連れているキュウベえにさやかは驚いた

「どうかしましたの、さやかさん？」

まどかたちの親友、志筑仁美が不思議そうにさやかを見ていた。その後まどかに近づき

（やっぱ、そいつ、あたしたちにしか見えないんだ）

（そうみたい…）

「あの…」

「なんでもない、行こうぜ！」

とさやかは仁美と並んで会話をした。ここでまどかが

（頭で考えるだけで、会話ができるみたいだよ）

とさやかは反応しまどかの方を向いた。

（ええ！？あたしたちそんな力が…？）

（いやいやー、僕が間で中継してるだけ。でも、内緒話には便利でしょ）

（なんか変な感じ…。それでマミさんや遊星さんと会話できるの？）

（マミとはできるけど、遊星は魔法少女じゃないから会話できないよ）

（でも、遊星さんはキュウベえが見えるんじゃない？）

（彼は魔法少女とは違う力があるから見えるんだよ。だからテレパシーで会話できないんだよ）

（そっかー。遊星さんともっと話したいこといっぱいあるしな…）

（さやかちゃん…）

「お2人とも、さっきからどうしたんです？しきりにめくばせしますけど？」

と仁美が不思議そうな顔をして2人に聞いた。

「え？いや、それはその…」

そのとたん仁美はかばんを落とした。

「まさか、目と目でわかりあえる間柄ですの？まあ！たった一日で急接近だなんて…あの後いつたいなにが…？」

と2人が困った顔をして

「いや…、さすがにそこまではないわ…」

「あのあと、いろいろあつたんだけどさ…」

「でもいけませんわ！おふたがた、女の子同士で！それは禁断の恋の形ですよー！」

とさけんで学校の方へ走っていった。

「バッグ忘れてるよー」

「今日の仁美ちゃん、なんだかさやかちゃんみたいだよ…」

「どういう意味だよ、それは！」

続く

第五話（後書き）

遊星最初しかでてない…！

第六話（前書き）

ここから少しペースUPします！今までの反省をいかして…（できるかな？）いよいよ魔女退治の開始です！

第六話

「そろそろ、時間か」

時間を見ると、午後4時。遊星はとあるファーストフード店でマミが来るように言われてたので行くことにした。そして店に着き、入ると席に座ってるマミとまどかとさやか、そしてキュウベえがいた。

「待たせたな」

「来ましたね」

「こんにちは、遊星さん」

「こんにちは」

「やあ、遊星」

「やあ、まどか、さやか、キュウベえ」

「さて、遊星さんも来たことだし、魔法少女体験ツアー第一弾、はりきっていきましょうか。準備はいい？」

「準備になっているかどうか分からないけど…もってきました!」

さやかは包んであった布から金属バットを取り出した。

「何も無いよりはましかと思って」

「まあ、そういう覚悟でいつってくれるなら頼もしいわ…」

マミは少し苦笑いで言った。

「遊星さんは？」

「俺もデッキは万全だ」

テーブルにカードを並べていった。

「大丈夫のようね」

「まどかは何か持ってきた？」

「えっと、私は…」

とかばんからノートを取り出して、3人に見せた。それには自分の魔法少女姿の絵が描いてあった。

「うわあ…」

「とりあえず、衣装だけは考えておこうかと思って…」

「「ぷっ、はははははは」」

「え？ええ！？」

とノートを見てさやかとマミは笑い出し、まどかは顔が赤くなった。

「うん、意気込みとしては十分ね」

「こりゃあ、参った。あんたには負けるわ」

「うう…」

「まあ、まどかもいつか魔法少女になるんだからこれはいいと思うな」

遊星は慰めの言葉を言った。そして、遊星たちはこの前の倉庫に行った。

「これが魔女が残した魔力の痕跡。基本、魔女探しは足頼みよ。こうしてソウルジェムのとらえる魔女の気配をたどってくわけ」

「意外と地味ですね…。」

「遊星さん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

D・ホイールを担いで歩いてる遊星を見てまどかは少し心配していた。そしてそのままソウルジェムで魔女の気配を追っていき、そして、荒廃したビルに着いた。

「間違いない、ここよ」

「！おい、あれ！」

と遊星は上を見て指差して言って3人は指差した方を見ると、ビルから女性が飛び降りた。

「な…！」

「きゃあ…！」

マミはすぐさま魔法少女に変身して、女性を救った。

「なんだこれは？」

遊星が倒れている女性の首を見ると、何かが描かれていた。

「魔女の口付け…」

「ここに魔女が…」

「ええ、行くわよ」

「ああ！」

遊星はすぐさまデュエルディスクを装着し、デッキをセットし、シヤッフルしカードを5枚ドロートした。そして、魔女の結界へつながる扉が開かれた。

「今日こそ逃がさないわよ…」

とマミはさやかが持っているバットを握り締め、そのバットは魔法のバットのようなものへと変わった。

「うわ…」

「すごい…」

「きやすめだけど、それで身を守るのに役に立つわ。絶対に私のそばに離れないで」

「「はい！」」

そして4人は魔女の結界へと入っていった。そして遊星はカードを一枚ドロ―した。

「【ジャンク・シンクロン】を召喚！」

「この前助けてくれたモンスター…」

「さらに！自分の場にジャンクとなつたモンスターが存在する時、このモンスターは特殊召喚できる！【ジャンク・サーバント】を特殊召喚！レベル4【ジャンク・サーバント】にレベル3【ジャンク・シンクロン】をチューニング！」

【ジャンク・シンクロン】は3つの輪となり、それに【ジャンク・サーバント】がくぐった。

「集いし叫びが木霊の矢となり空を裂く！光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ、【ジャンク・アーチャー】！」

出てきたのはオレンジ色のよろいをまとった弓矢の戦士！

「【ジャンク・アーチャー】…」

「【ジャンク・ウォリアー】のほかにもいるんだ…」

とそこに魔女の手下が襲い掛かってきた。

「いけ！【ジャンク・アーチャー】！スクラップアローー！！」

【ジャンク・アーチャー】は矢をはなち、手下を倒した。そしてマミも銃をだし、手下を倒していく。

「どう？怖い？」

「なんてことねーって！」

マミの言葉をうけさやかは少し強がった。そして、このままどんどん進んでいき、最深部へとたどり着き、そこには羽根の生えた薄気味悪いものがいた。

「あれが…」

「そう、あれが魔女よ」

「ぐろい…」

「あんなのと戦うんですか？」

「大丈夫、負けるもんですか！」

マミはさやかが持っていたバットでバリアをはって、マミと遊星は魔女を倒すべく立ち向かった。

「遊星さん！」

「ああ！」

マミは帽子から何本か銃を出し、銃で逃げまよう魔女を撃ち、【ジャンク・アーチャー】は矢で狙い打っていった。

「速い…」

だが、その時マミが油断して、魔女の手下に捕まり、銃をはなつもはずれていった。

「ああ！」

「マミさん!!」

「マミ!! なっ!!?」

気づくと【ジャンク・アーチャー】もつかまっていた。

「【ジャンク・アーチャー】!!」

「大丈夫、未来の後輩にかっこ悪いとこ見せられないしね！」

とはずれた銃のあとから黄色い触手が出て、魔女を捕まえた。そしてマミはリボンで開放して【ジャンク・アーチャー】を助けた。

「遊星さん!!」

「ああ！」

カードを一枚ドロし、すかさず、

「【ターボ・シンクロン】を召喚！レベル7【ジャンク・アーチャー】にレベル1【ターボ・シンクロン】をチューニング！！」

【ターボ・シンクロン】は1つの輪となり【ジャンク・アーチャー】はくぐった。

「集いし願いが新たに輝く星となる！光射す道となれ！シンクロ召喚、飛翔せよ！【スターダスト・ドラゴン】！」

咆哮とともにでてきたのは遊星のエースモンスター、白銀の竜【スターダスト・ドラゴン】

「でた！！遊星さんの【スターダスト・ドラゴン】！！」

「綺麗……」

「響け！シューティング・ソニック！！」

【スターダスト・ドラゴン】が解き放った白銀の閃光は魔女を貫き、倒したのであった。

「勝ったの？」

「すごい……」

魔女を倒したと同時に結界がなくなり、元の荒廃したビルに戻った。そして、【スターダスト・ドラゴン】も消えていった。とマミが何かを拾った。

「それは？」

「これはグリーンフシード。魔女の卵よ。」

「卵…」

「運がよければ、時々魔女が持つてるの」

「大丈夫、その状態は安全だよ。むしろ貴重なものだ」

「私のソウルジェム、タベよりにごってるでしょ」

「そういえば」

「このグリーンフシード使えば、ほら」

マミはグリーンフシードをソウルジェムに近づけて、ソウルジェムから黒い霧がグリーンフシードに吸い込まれた。

「きれいになった。」

「この前話してた、魔女の見返りつてのがこれ」

とマミはグリーンフシードを投げ捨てた。そしてその方向には…

「あ！」

そこにはこの前いた黒髪の女の子がいた。

「あなたにあげるわ。あと一度くらいは使えるはずよ。曉美ほむらさん」

（曉美ほむら…。あのこの名前か…）

「あいつ…」

「それとも、くふくかしら？」

「あなたの獲物よ、自分のものにすれば」

とほむらはマミにグリーンフィードを投げ返し、それをマミが手でとる

「それと、不動遊星」

「！」

「あなたの『スターダスト・ドラゴン』だけでは、後に出てくる魔女は倒せない！」

と行ってどこかへいった。

「くー！遊星さんのモンスターまで悪くいうなんて、かんじの悪いやつー！」

「仲良くできればいいのに…」

「お互いそう思ってたらね…」

続く

第六話（後書き）

スターダストだせたー！！…これだけです（すみません…）

第七話（前書き）

アニメ3話のお話です

第七話

遊星たちは今日もまた、魔女狩りをしていた。

「ティロフィナーレ!!」

マミがとどめをさし、結界から元の場所に戻っていった。

「やっぱりマミさんカッコイー!!」

「もう! 見せ物じゃないのよ」

「わかってますって!」

「グリーンフシードがないな...」

遊星があたりをみまわしてそういった。

「今のは魔女から分裂した使い魔でしかないからね」

「ここんとはずればつかじゃない? 遊星さんの『スターダスト・ドラゴン』も最近見てないし」

「さやかちゃん...」

「使い魔だって、成長すれば魔女になっちゃうの。放っておけないのよ。さ、帰りましょう」

と帰る途中

「2人とも願い事決まった？」

「うーん、まどかは？」

「私も…」

「まあ、そういうものよね。いざ考えるととなると」

「マミさんはどんな願い事したんですか？」

聞いたとたんマミは深刻な顔をしてまどかは少しあわてていった。

「いや、あの…、どうしても聞きたいってわけじゃなくて…」

マミはやさしく微笑み言った。

「私の場合は…」

と自分が願い事をしたときの話をし、遊星が少し深刻な顔をした。

「そうか…」

「そういえば、遊星さんのご家族って…」

まどかが心配そうに遊星に聞いてみた

「俺の父さんは、ゼロリバーで亡くなったんだ」

「あ…、ごめんなさい」

「いいんだ、父さんの知り合いから聞いた話だから」

「でも、遊星さんは平気なの？お父さんがいなくなってる…」

「俺はいろいろな人たちと出会い、俺を支えてくれた仲間がいる。仲間がいてくれたから、今の俺はいるんだ」

「遊星さん…」

さやかがマミにこんなことを

「ね、マミさん、願い事って自分の事柄じゃないと駄目なのかな？」

「え？」

「たとえば、あたしなんかよりよほど困ってる人がいて、その人のために願い事するのは…」

「それって上條君のこと？」

「た、たとえ話だよ！」

「知り合いか？」

「お友達です」

「別に願い者自身の対象になるわけじゃないけどね」

「でも、あまり感心できた話じゃないわ。他人の願いをかなえるな

ら、自分のことを考えておかないと。美樹さん、あなたは彼に夢をかなえてほしいの？それとも彼の夢をかなえて恩人になりたいの？」

「マミ…」

「同じことでも全然違うことなのよ。」

とさやかが少し黙っていた。

「ごめんね、でも今のうちにいつとかないと。」

「さやか…」

遊星もマミの言葉をうけ、さやかをじっと見つめる。すると、

「…そうだね、あたしの考えがあまかった。ごめん」

「やっぱり、難しい事柄よね。あせって決めることじゃないわ」

「僕としては早く決めてくれれば助かるんだけどね」

「だめよ、女の子をせかす男子は嫌われるぞ」

とこんな会話が続き、まどかとさやかと別れ、遊星とマミ2人だけになった。

「遊星さん」

「なんだ？」

「ちょっとよっていききたいところがあるので先に帰っていただけないか？」

「一人で大丈夫か？」

「ええ、すぐに済むことなので」

「わかった、気をつけてな」

遊星はそのまま帰っていった。すると、背後からほむらがやってきた。

「わかってるの？あなたは無関係な一般人を危険に巻き込んでる」

「3人はキュウベえに選ばれたのよ。もう無関係じゃないわ。」

「あなたはあの2人を魔法少女に誘導している。」

「それが迷惑なわけ？」

「ええ、特に鹿目まどか。それと魔法少女ではないけど不動遊星」

「ふうん。あなたは恐れてるんじゃないのかしら、鹿目さんと遊星さんの力に。それに遊星さんの【スターダスト・ドラゴン】を見て黙っていられるわけにもいかないものね」

「それでも、あの竜リリィだけでは…」

マミがほむらの手のふるえにきずき言った。

「あの人にはまだ大きい力がある。それに気づいてるんじゃないかしら？」

「…」

「お互い、もう会わないことにしましょう。」

「ええ、そうね。そうしてもらえば…」

と行ってほむらはどこかに行った。

「…はやく帰らないとね…」

続く

第八話

「よし、直った」

遊星は職を見つけてから毎日働いていた。職は自分の世界でやっていた修理屋をしていた。

「おお、本当に直った。すまないねえ」

「いえ、これぐらいは慣れてますから」

修理が終わり、D・ホイールを走らせ、とある病院の近くでまどかとさやかとキュウベえにであつた。

「あ、遊星さんだ。」

「こんにちは」

「や、3人とも」

「今日もお仕事ですか？」

「ああ、今終わったところだ。まどかたちは？」

「さやかちゃんのお友達のお見舞いです」

「そうか」

ここでさやかがふてくされていた。

「でも、都合悪くて会えなかったんです…」

「あ…」

まどかが横を向いて何かを見ていた。

「どうした？」

「あれって…」

遊星とさやかがまどかが指差した方を見ると何かがささっていた。

「グリーンフィードだ！孵化しかかってる！」

「なに！？」

「なんでこんな所に！？」

「魔力の侵食が始まってる！結界が出来上がるまでココから逃げよう！」

その時、さやかが首を振っていった。

「駄目だ！魔女が病院に取りついたらやばいって…マミさんが言うてた！」

「確かに、そんなことをいつてたな！だが、どうする？」

「あたし、ここで見張ってる！まどかと遊星さんはマミさんを！」

「でも…」

「無茶だよ！孵化にはまだ早いけれど、結界に閉じ込められたら、君は出られなくなる！」

「でも、放って置けば逃げられちゃうでしょ！」

「しかし…」

キユウベえは考えてさやかの肩に乗り

「わかった。僕も一緒に残ろう。結界迷路に閉じ込められてもマミとならテレパシーで僕とさやかの位置を伝えられるから」

「キユウベえ…」

「わかった」

「私たちはマミさんと呼んでくるから！」

「うん！頼んだよ！」

まどかと遊星は走ってマミを呼びにいった。

そして、数分後

「ここね」

まどかと遊星はマミを連れて戻ってきた。遊星はデュエルディスク

を装着し、3人は結界の中に入った。

（キュウベえ、状況は？）

（大丈夫。すぐ孵化はしないから。急がなくていいから、なるべく静かにきてくれるかい？大きな魔力を使って卵を刺激するのはまずい！）

（わかったわ）

テレパシーで会話した後、マミは遊星に言った。

「遊星さん、魔力の刺激で孵化してしまうから、まだモンスターを召喚しないで」

「わかった」

「まったく、無茶しすぎっていいんだけど、今回に限っては…！」

その時、ほむらが3人の目の前にいた。

「またあなたね、暁美ほむら」

「今回の獲物は私が狩る。もちろん結界内の3人の安全は保障する」

「私が信用するとでも？」

マミは魔法でほむらを縛り付けた。

「ば…バカ！こんなことしてる場合じゃ…！」

「怪我させるつもりは無いけど、暴れたら保障しかねるわ。行きましょう、鹿目さん、遊星さん」

「はい…」

「あ…ああ…」

「待ちなさい！今度の魔女は…これまでと訳が違う！！」

ほむらの忠告を無視して3人は結界の奥に進んでいった。

「いいのか？あれで？」

遊星がほむらを心配そうにマミに言つとマミは不機嫌な顔をした。

「いいのよ、横取りされたら困っちゃうし」

「あの！マミさん」

「何？」

「私なりに願いを考えてみたんです。考えが甘いつて怒られそうなんです」

「いいわ、聞かせて？」

「……私、得意な学科とか自慢できる才能がなくて、誰の役に立ってないまま毎日をごしてく自分がずっと嫌だったんです。でも誰かを助けるために戦っているマミさんと遊星さんを見てそれと同じこ

とができるかもしれないって知って何よりも、そのことがうれしくて…だから私魔法少女になれたらそれで願い事かなっちゃうんです。こんな自分でも、誰かのためにって胸を張っていきしていけることが一番の夢だから！」

「まどか…」

ここでマミが暗い顔をして

「…私、あこがれるほどのものじゃないわよ…ホントわね、戦うの怖いんだ。あなたたちの前でかつこつけて先輩ぶってばかり、独りになると泣いてばかりなの。…だからわたし…」

「そんなことないです！マミさんはもう独りじゃないですよ」

「鹿目さん…」

「そうだ、マミは独りなんかじゃない。まどかやさやかにキュウベえ、そして俺がいるじゃないか」

「遊星さん…」

「マミは俺達の仲間だ。」

「仲間…」

仲間という言葉聞いて、マミは泣いた

「あ、あはは…ちゃんと先輩らしくしてなきゃなのに…やっぱだめだな…私…でもありがとう…もちろんだわ」

「俺達は仲間だ！だから、悲しむことなんてないんだ」

遊星はやさしく微笑んだ。

「うん…！」

「そうね！」

その時、キュウベエのテレパシーが

（大変だ！マミー・グリーンフシードが孵化していく！）

「…ええ！わかったわ！遊星さん！」

「ああ！」

マミは魔法少女に変身して、遊星はデッキをセットし、カードを5枚ドロ―し、1枚カードを引いた

「手札からレベル2以下のモンスターを墓地に送り、このモンスターを特殊召喚する！【クイック・シンクロン】を特殊召喚！さらに、自分の場にチューナーがいる時、このモンスターを墓地から特殊召喚する！【ボルト・ヘッジホッグ】を特殊召喚！そして、【クラスタ―・ペンデュナム】を召喚！レベル2【ボルト・ヘッジホッグ】とレベル1【クラスタ―・ペンデュナム】にレベル5【クイック・シンクロン】をチューニング―！」

【クイック・シンクロン】は5つの輪となり2体のモンスターがくぐっていった。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！シンク
口召喚！粉碎せよ、【ジャンク・デストロイヤー】！」

出てきたのはロボットアニメに出てきそうな黒き戦士

「いけ！【ジャンク・デストロイヤー】！デストロイ・ナックル！」

【ジャンク・デストロイヤー】はこぶしで手下を粉碎していき、マ
ミも銃で手下を倒していった。

（私…もう怖くない！私はもう独りじゃない！！）

続く

第八話（後書き）

次回、いったいどうなってしまうのか!？

第九話（前書き）

ネタバレになります、マミさんは死なせません！ってこれが自分の気持ちです。そして、5D・sでおなじみのあの男が登場します！

第九話

そして、3人は魔女が潜む結界の奥にたどり着いた。

「お待たせ！」

「それで、魔女は？」

「あそこ！」

さやかが指差した方を見るとまるでかわいらしいぬいぐるみのような魔女が高いイスの上に座っていた。

「あれか…」

「遊星さん、ここは任せて」

「しかし…」

「大丈夫よ。遊星さんばかり、頼ってばかりだとかっこがつかないからね」

「…わかった、だが気をつけろよ」

「ええ」

そして、マミは魔女に攻撃をしかけ銃で魔女を攻撃していった。

「すごい…」

（しかし、ほむらがこれまでと訳が違うといていたが、いったいあの魔女に何があるというのだ？）

遊星がほむらの言葉に疑問をだいてるうちにマミがとどめをさすところだった

「ティロ・ファイナーレ！！！」

ダンッ

とどめをさし、やったと誰もが思った次の瞬間！突然、魔女から大蛇のようなものがでてきた。

「え…？」

「な…！」

魔女はマミの近くにいった

（ほむらが言ってたことはそういうことだったのか！）

すぐさま、遊星はマミを助けようと【ジャンク・デストロイヤー】にしじをした。

（駄目だ！間に合わない…！）

魔女はマミの頭をくいちぎろうと口をあけ、もう絶体絶命だった…

その時…

ガシッ

「!？」

「「あつ！」」

「あれは…」

突然、黒い竜が現れ、魔女の頭をおさえマミを助けた。そのまま魔女を振り払った。

「な…なに…あれ…!？」

おびえるまどかとさやかだが、遊星は冷静に…

「あれは【レッド・デーモンズ・ドラゴン】だ。」

「【レッド・デーモンズ・ドラゴン】…？」

「てことは…」

「遊星ー!!」

後ろから誰かの声が聞こえた。遊星に聞き覚えがあった。それは…

「ジャック！」

「遊星、こんなところで何をしている！」

出てきたのは遊星の仲間、赤き竜のシグナー、ジャック・アトラスだった。

「遊星さん、その人は？」

「彼はジャック、俺の仲間だ」

「ええ！？遊星さんの？」

「ああ」

「それよりもここはどこだ？」

「話せば長くなるんだが……」

そして、ジャックはすたすたと歩きながらいった

「事情はわからんが、あのでかいやつをやっつければいいのだな？」

「ああ、そういうことだ」

ジャックはマミの目の前に立ち……

「ここは俺に任せろ！」

「はあ……」

「このジャック・アトラスがせいはいしてくれる！いけ！【レッド・デーモンズ・ドラゴン】！！」

咆哮とともに【レッド・デーモンズ・ドラゴン】が突っ込んだ。

「アブソリュート・パワーフォース！！」

【レッド・デーモンズ・ドラゴン】の右の拳が炎に包まれ、その拳が魔女にあたり、魔女はそのまま倒していった。

「す…すごい…。」

「ん？」

そして、魔女を倒し、結界が元の世界に戻った。

「はあ、また誰かをあてにしちゃったみたいね」

「なに、ジャックがきてくれなかったら、マミはどうなってたものか…」

「そうね…」

「すごいですよ！ジャックさんの【レッド・デーモンズ・ドラゴン】」

さやかが目を輝かせていた。

「あたり前だ！あんなもの、この【レッド・デーモンズ・ドラゴン】

の敵ではないわ!」

「…なんか、すごい人ね…」

「それがジャックという男だ」

すると…

「あ…!」

ほむらが目の前にやってきた。

「まさか、赤き竜のシグナーがもう一人出てくるなんて…」

「なんだ、貴様は?」

「…ま、いいわ。今回の獲物は貴方に譲ってあげる」

そしてそのままどこかに消えていった。

「なんだ、アイツは?」

「…」

「あ…」

すると、まどかが何も言わずに歩いて行ってしまった。

「あ、ちょっと!お先に失礼します…!」

さやかがその後を追っていった。

「まどか…」

続く

第九話（後書き）

マミさんを殺したくないという気持ちでいっぱいでした。これから
も5D・sのキャラは増えていく予定です。…これでいいのかな…
？

第十話（前書き）

アニメ七話ではさやかがかわいそうな展開だと聞いてちょっとショック…。この小説もどう進めておくか…検討中です。

第十話

遊星たちはジャックをつれてマミの家に帰宅し、ジャックに今の現状を話した。

「…なるほど、そのキュウベえが俺たちを導きこの世界に…」

「ああ」

「俺も遊星と同じ夢を見た」

「なに!？」

「その夢を見た後、俺は行方不明の遊星を捜しに行って気がつけばこの世界にいたというわけだ」

ジャックはコーヒーを飲みながらそういった。

「それで、その魔女を倒すのが、魔法少女の務めでさっきいたあの小娘2人もキュウベえに選ばれたと…」

「そうだ。確かにまどかとさやかはキュウベえに選ばれてるが、まだ魔法少女ではない」

「…ふん、魔女ごとき、このジャック・アトラスが倒してやるわ!」

「…なんかすごいひとね…」

「それがジャックだ」

マミは呆氣にとられていた。

「それに鹿目さん、だまっっていつちゃったけれど……」

「あの時、マミが殺されそうなところを見て怖くなったんじゃないか？」

「明日、学校で話してみるわね」

「ああ」

そして、翌日の昼休みでまどかとさやかは…

「ねえ、まどか。魔法少女になりたいと思ってる？」

「……」

まどかはただ、黙っていた。

「そんなわけないか、仕方ないよね。あの時、ジャックさんが助けくれなかったらマミさんは確実に殺されてた。」

「もし、マミさんが死んでたらこの街どうなってたの？」

「この街の縄張りにはマミがしめてるからね。いなくなれば、代わりにここに来るよ」

「代わりって他に魔法少女っているの？」

「うん」

「…私、遊星さんとマミさんに魔法少女になるって約束したけれど、やっぱり無理だよ…！あそこで死んでいたら…、私…！」

「まどか…」

「わかった、僕もマミも無理に契約とは言わない。僕の契約を求めている子を探しに行くよ。あと、マミや遊星とともに魔女退治に専念するよ。短い間だったけれど、お別れだね。楽しかったよ。ありがとう」

そして、キュウベえはどこかにいつてしまった。

そして、放課後、まどかはマミの家に行く途中、遊星にあった。

「やあ、まどか」

「こんにちは、遊星さん…」

「まどか…」

「これ…」

まどかは遊星にノートを渡した。

「これは…」

「遊星さん…ごめんなさい…。私、弱い子で…ごめんなさい…！」

そして、そのまま走って行った

「まどか……」

遊星はそのまま黙ってまどかを見た。

続く。

第十話（後書き）

しばらく、週に1、2回の更新になります。

第十一話（前書き）

今週いよいよ遊戯王の映画アンコールかー。観にいきたいですーそんなこんなで第十一話です！

第十一話

ガチャ

遊星はマミの家に帰っていた。

「ただいま」

「あら、お帰りなさい」

「マミ、まどかから何か…」

「いえ、今日は会ってはいないけれど、キュウベえと話したら…」

「そうか…」

そして遊星はマミのノートをさしだす

「それは」

「まどかのノートだ」

ノートを受け取ってマミは一通りノートを見て悲しい顔をした。

「あの子、魔法少女に憧れてたけれど…」

「あんなもの見られたらさすがにな…」

遊星は部屋のあたりを見た。

「そういえば、ジャックは？」

「ジャックさんは出かけていったわ」

そして、まどかは

「…」

暗い顔をして道を歩いていた、その時

「自分を責める必要なんて無いわ、鹿目まどか」

「ほむらちゃん…」

目の前にほむらがいた。

「話があるの、私の忠告聞き入れてくれた？」

まどかは小さく頷いた

「そう、ならよかったわ」

ほむらは微笑んだ。

「ねえ、もしあの時ママさんが死んでいたらどうなっていたの？」

「あの時、バマミが死んでいたら誰もきずかないわ。向こう側で死ねば死体だって残らない。永久に行方不明のまま…。魔法少女の最後なんて、そういうものよ」

「そんなのひどいよ…。ママさんだっけと独りで戦っていたのに…」

まどかは泣いていた。

「でも、今の彼女には魔法少女ではないけれど、赤き竜のシグナー、不動遊星、ジャック・アトラスの2人がいる。彼らがいれば心強くなるけれど、いつかは…」

「…それでも、ママさんのこと忘れない」

「そういつてもらえるだけ巴马ミは幸せよ。羨ましいほどにね」

「ほむらちゃんのことだっけ忘れないよ！」

「！」

「遊星さんもジャックさんも、友達も家族も絶対に忘れないよ！」

ほむらは少しだけ悲しい顔をして

「あなたは優しいすぎる。忘れないでそのやさしさがもっと大きな悲しみがひきおこることを」

そのままほむらは帰っていった。

「ほむらちゃん…」

そのころ、さやかは病院で

「恭介！今日もCD買ってきたからさ、後で聴いてね！」

恭介は暗い顔をしていた。

「どうしたの？」

「ねえ、さやかはさ、僕のことをいじめてるの？」

「え？」

「なんで今でもまだ、音楽を聴かせるんだ？嫌がらせのつもりなのか？」

「だってそれは…恭介が音楽好きだから…！」

「もう聴きたくないんだよ！自分でも弾けもしない音楽なんて！」

恭介は左手で置いてあったCDを叩き壊した。

「や、やめて！大丈夫だよ！きっと治るよ！諦めなければいつかきつと…」

「諦めろって言われたのさ」

「え？」

「今の医学ではどうしようもないって、バイオリンは諦めろってさ。動かないんだ…もう…。奇跡か魔法がない限り…」

とさやかは魔法と聞いて言った。

「あるよ、奇跡も魔法もあるんだよ」

そしてまどかは1人で街を歩いていた。

（ほむらちゃんとは話し合えば友達になれそうなのに…）

とその時

「あれ？仁美ちゃん…？」

まどかはすぐさま仁美を追いかけた

「どうしたの？仁美ちゃん。今日のお稽古事は？…！」

仁美の首を見て何かがついていた。まどかはそれを見て驚いた。

（あれってまさか…！）

「あら、鹿目さんごきげんよう」

「仁美ちゃんどこに行くの！？」

「どこってここよりいいところですよ。そうですね、鹿目さんも是非一緒に」

そして偶然街の中をホイール・オブ・フォーチュンで出かけてたジヤックが

「ん？あれは鹿目？なぜあんなとこに…。それになんだ？あの多人数は？」

すぐさまジャックはホイール・オブ・フォーチュンから降りてまどかとその多人数を追いかけた。そのさきには

「工場？なぜこんなとこに…」

そのままジャックはいりこもうとしたがシャッターが閉められた。

「なに！？くそ！」

ジャックはどこか入り口はないかさがしたが、見つからなかった。

「どうすれば…」

その時、工場の窓からバケツが投げ出された。

「これは…洗剤？中にいったい何が…？」

中の様子を窓から見ようとしたその時…！

「助けて…だれか…！」

「…！」

工場から誰かの声を聞いてジャックは

「その声、鹿目か！？おい！どうしたんだ！？」

工場のシャッターをどんとたたいた。

「くそ！このシャッターが開けば…」

「ジャックさん、ここは任せて」

「！お前は…！」

そして先から工場の中にいたまどかは…

「あ…」

魔女の結界の中にいた。

（これって、罰なのかな？私が弱虫で嘘つきだから、きっとバチが
あたったんだ）

魔女の手下が襲いかかろうとしたその時…

「うおりゃあああ！！」

ズバァ

ここで魔法少女になったさやかがまどかを助けた

「…これで…とどめだっ！」

そのまま魔女を切り裂いた。その後結界が元の工場に戻った。

「やー、ごめん。間一髪だったねー」

「まったく、1人で魔女のところにいくとは危なっかしいやつだ」

「さやかちゃん…、ジャックさん…」

「初めてにしてはうまくいったでしょ？あたし」

「ふん、俺の【レッド・デーモンズ・ドラゴン】には劣るがな」

「ちょっと、その言い方はないんじゃないの？」

その時

「あなた…」

ほむらがやってきた

「遅かったじゃん、転校生？」

そのころ、キュウベえは誰かと話していた。

「いやあまさか、君が来るとはね」

「こっちは人手が足りないって言うから来てやったのに話が違っじやんか？」

「悪いね、新しい魔法少女がいるんだ。さっき契約したばかりだけど」

「なにそれ、ちょおム力つく。でもまあいいや、マミはともかく、

こんな絶好の縄張りみすみすルーキーのヒヨっ子にくれてやるのも
シヤクだしね」

「どうするんだい？杏子？」

「決まってるじゃん、ぶっ潰せばいいでしょ？その子」

続く

第十一話（後書き）

杏子だせた…。それだけです

第十二話（前書き）

アニメ第五話のお話スタートです。

第十二話

家に帰宅したジャックは、遊星とマミにさやかが魔法少女になったことを話した。

「さやかが!？」

「ああ」

「そう、それで美樹さんは何をお願いしたの？」

「なにやら親友の肩を治すという願いだそうだ」

「親友の…?」

するとマミが少し嬉しそうな顔をした。

「なにはともあれ、後輩ができたのはうれしいことね」

ジャックが少し呆れた顔をした。

「まったく、心配じゃないのか？」

「わかってるわ。まだ魔法少女としてまだ半人前だし…」

「なら、俺がさやかの様子を見ようか？」

「遊星さん？」

「さやかのこと俺も心配だ。だから俺がさやかの魔女退治の手伝いをしたい」

「わかったわ。じゃあ、ジャックさんは私と一緒に魔女退治のお手伝いしてもらえるかしら」

「ふん、足を引っ張らん程度にな」

「もう」

そんなこんなで翌日、今日も遊星は修理屋の仕事を終えてとある、病院のちかくにいた。

「さて、帰るか…」

その時

「あ、遊星さん」

「さやか」

さやかが目の前にやってきた。

「ジャックから聞いた。魔法少女になったんだってな」

「はい」

「少しおせっかいだと思うんだが、お前の魔女退治、俺も手伝ってもいいか？」

「遊星さん？」

「俺もさやかのことが心配なんだな。だから俺もさやかとともに魔女退治を手伝いたい」

「いやー、むしろ心強いですよ。遊星さんとなら」

「さやか…」

「あたしも本当はまだ怖いですよ。魔女と戦うんだから。だから、遊星さんと一緒なら大丈夫ですよ」

「そうか」

「明日の夕方頃、あたしの家まで来てくれますか？」

「わかった」

そしてさやかは自分の住所を遊星におしえて、病院の方に行った。そしてある展望台から杏子が遊星たちを見ていた。

「ねえ、誰なの？ヒヨツ子といたあの男？」

「彼は不動遊星。赤きシグナーの決闘者だよ」
デュエリスト

「ふうん、前キュウベえが話してたやつねえ。なんか超かつこいいんだけど」

「でも、彼の力は杏子にはかなわないよ」

「あたしが狙ってんのはあのヒヨツ子よ。別に興味はない」

「そう、でも君のやってることは無謀だってことだ」

「いいじゃん、私は私のやり方でやるの」

杏子はどこかへいった。そして、この魔法少女同士の戦いによってさらなる運命が待つとは誰も思わなかった。

続く

第十二話（後書き）

久しぶりに書いたのでちょっと駄文になってしまったかもしれない……（めぼくない……）

第十三話

今日はマミとジャックの2人で魔女退治をしていた。

「レベル5【バイス・ドラゴン】にレベル3【ダーク・リゾネイター】をチューニング!!」

【ダーク・リゾネイター】は3つの輪になりそれを【バイス・ドラゴン】がくぐる

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい!シンクロ召喚!我が魂、【レッド・デーモンズ・ドラゴン】!」

ジャックの上空に巨大な炎の塊が現れ、爆発する。その中から【レッド・デーモンズ・ドラゴン】が出てきた。

「アブソリュート・パワーフォース!!」

炎につつまれた【レッド・デーモンズ・ドラゴン】の右手が魔女の手下たちを一気に粉碎した。

「今だ!」

「ええ!!」

【レッド・デーモンズ・ドラゴン】の背後からマミがでてきてでかい銃を取り出し魔女に向ける

「ティロ・ファイナーレ!!」

バキュウウン

マミのはなった銃で魔女は倒され、結界が元の世界に戻った。

「グリーンシードを落とさなかったな」

「使い魔ね。【レッド・デーモンズ・ドラゴン】の力すごいわね。
遊星さんの【スターダスト・ドラゴン】以上の力はあるわ」

「ま、遊星は俺以上の力はある」

「あと、美樹さん大丈夫かしら…？」

「心配するな、遊星がついてるんだから心配することは無いだろ」

「そうね」

マミとジャックがさやかのことを考えてる頃、遊星はさやかの魔女
退治のため彼女の家に行った。

「ここか」

すると、入り口の前にまどかがいた。

「遊星さん」

「まどか」

すると入り口から、さやかとキュウベえがでてきた。

「あ、遊星さん、まどか」

「さやかちゃん、これからその…」

「そ、遊星さんと一緒に魔女探しにパトロール。正義の味方の勤めだからね」

少し不安な顔になるまどか。

「平気なの？」

「平気平気。遊星さんだってついてるんだし」

「あ…あのね、私、何もできなくて、足手まといになるってわかってるけど、邪魔にならないところまででいいの！いけるところまで…」

「ついていくのか？」

遊星の問いにまどかはこくんとうなずいた。そんなまどかをさやかはみかねた

「頑張りすぎじゃない？」

「ごめん、駄目だよね？迷惑だよね？」

「ううん、すっごくうれしい」

さやかはまどかの手を握った。

「手が震えだしちゃってさ、さつきから止まらないの。情けないよね1人でいくのが心細くてさ」

「さやかちゃん」

「邪魔なんかじゃない、すごく嬉しい！遊星さんやまどかがいてくれるだけですごく心強いよ！百人力って感じ」

「私…」

「その時は俺たちがまどかを守る。さやかが言うんだ、不安になることは無い」

「遊星さん…」

「一緒に魔女を倒しにいこ！」

「うん」

「ああ」

そして3人は魔女を探しにいった。そんななか遊星たちを誰かが見ている。誰かが見ているの知らない遊星たちは魔女を発見し、魔女退治が始まった。

「ん？あれって…」

誰かが見ているの知らない遊星たちは魔女を発見し、魔女退治が始まった。

「行くぞ！」

「はい！」

さやかは魔女に変身し、遊星はデュエルディスクにデッキをセットをし、カードを5枚引き、さらに1枚ドローした。

「はああ！」

さやかが解き放った剣で魔女を追い詰めていく

「遊星さん！」

「ああ！このモンスターは手札のレベル2以下のモンスターを墓地に送ることで手札から特殊召喚をする！【クイック・シンクロン】を召喚！さらに場にチューナーモンスターがいる時、墓地から特殊召喚する！【ボルト・ヘッジホッグ】を特殊召喚！さらに【ワンシヨット・ブースター】を召喚！レベル2【ボルト・ヘッジホッグ】とレベル1【ワンシヨット・ブースター】にレベル5【クイック・シンクロン】をチューニング！！」

【クイック・シンクロン】は5つの輪となり、【ボルト・ヘッジホッグ】と【ワンシヨット・ブースター】がくぐる

「集いし希望が新たな地平へいざなう。光さす道となれ！シンクロ召喚！駆け抜けろ、【ロード・ウォリアー】！」

出てきたの黄金の鎧をみにまわった王族の戦士

「いけ！【ロード・ウォリアー】！ライティング・クロー！！」

【ロード・ウォリアー】の攻撃で魔女は倒され、結界が元の世界に戻った。

「やった！」

「あーあ、なに勿体無いことしてんだよ？」

すると、遊星たちの前に長い赤髪の女の子がやってきた。

「「！？」」

「誰だ！？」

続く

第十三話（後書き）

次回は杏子VSさやか of 展開です（ネタバレ）

第十四話（前書き）

いよいよ杏子と接触です。そして5D・Sのあのキャラも登場です！

第十四話

「誰だ！？」

遊星たちの前に現れたのは佐倉杏子だった。お菓子を食いながら、魔法少女姿になっていた。

「まったく、なに使い魔やっつけちゃってんのさ？成長すれば魔女になってグリーンシードを落とすのによぉ…」

「ふざけるな！それが成長してしまえば、魔女になって他の人たちが襲われるだろ！」

「そうだよ！遊星さんの言うとおりだ！」

すると、呆れた口調で言い返した。

「そんな使い魔倒してもなんの見返りもないし、意味ねーんだよ」

「人々が襲われてもか…？」

「ああ、あたしには全然関係ないしね」

「貴様…！」

すると持っていた槍をさやかの方に向けた。

「あたしが用があんのはあんたじゃない。そっちの子だよ」

「な…!？」

「さやかをどうするつもりだ!？」

「決まってんじゃない。倒すんだよ!」

その時、遊星とまどかの目の前に赤色のおりみみたいなものがでてきて遊星とまどかは閉じ込められた。

「なに!？」

「さやかちゃん!」

「はじまるね、魔法少女同士の戦い…!」

「おい!なんでとめないんだ?同じ魔法少女だろ!」

キュウベえはなんともないかのように答えた

「遊星、魔法少女は人助けのために戦ってるんじゃないよ、見返りのために戦ってるんだよ」

「だが、こんなことしてなんとも思わないのか!？」

「僕からいわせれば無謀すぎるってことだけだよ」

「…なら、俺がさやかを助ける!」

すぐさま遊星はデュエルディスクにデッキをセットし、カードを5枚引き、1枚ドローをした。

「【スピード・ウォリアー】を召喚！」

だが、カードをセットすると突然電流が流れ、カードが吹き飛ばされた。

「一体どうなってるんだ？」

「杏子の魔法だね。あの時、君のディスクに触れて魔法をかけたんだ。だから今の君にはモンスターの召喚も魔法、罠^{トラップ}も発動できない」

「そんな…」

「ふん、邪魔はさせないよ。あたしの戦いをそこで黙って見れるんだな！」

「くっ！」

杏子とさやかは戦った。だが、圧倒的に杏子の方が上だった。なんとかさやかは剣で戦ったが、杏子の前にして苦戦し、倒れた。

「がは…！」

「さやかちゃん！」

「くそ…！」

それでもさやかは立った。

「これは…」

「さやか『癒しの願い』によって魔法少女になったから、回復力が優れてるんだよ。並みの魔法少女より倍高い」

「とはいえっても圧倒的にあっちの魔法少女の方が実力は上だ。いくら回復してもまた同じ繰り返しだ」

「そうだね」

「遊星さん！さやかちゃんは…」

「俺の力が使えれば、さやかは助けることはできるが、今はやつの魔法で使えなくなってる…」

「そんな…」

「大丈夫ですよ…。遊星さん…」

今の状態でさやかは立つのも精一杯だった。

「コイツは、あたしが倒すから…！」

「ち、強情なやつだな！」

実力はあっちの方が上だとわかってるが、それでも戦い続けるさやか。だが、遊星もまどかも黙って見ていられなかった。

「このままじゃ、さやかちゃんが…」

「だが、どうすれば…」

とうとうさやかは追い込まれた。

「終わりだよ！」

「く…！」

やりを構え、さやかにとどめをさしにいった。

——その時

ドッ

「なに！？」

さやかの目の前に人のような翼を持った黒い戦士がさやかを守った。
そして杏子は態勢を立て直した。

「あれは…」

「遊星さん？」

「おーい！」

すると後ろからある男がやってきた。それを見た遊星は驚いた。

「クロウ！？」

「大丈夫か？」

「あ…はい…」

遊星の仲間、クロウ・ホーガンがやってきたのだった。

「遊星もなぜそんなところに？」

「いろいろ事情があつてな…」

「おい！なんだ、てめえは？」

「へ！弱いものいじめをしてるところを黙ってみてるクロウ様じゃないんだよ！ここからは俺が相手だ！」

「ちい！」

すぐさま杏子は槍を構えた。クロウもすぐさま構えた。

「いくぜ！【BF・アーマード・ウィング】！！」

【BF・アーマード・ウィング】は杏子と激突しようとした。だが、その時

フッ

「え！？」

「なんだ？」

するとなぜか杏子と【BF・アーマード・ウィング】は場所が入れ替わっていた。そしてその間に…

「あれは…」

「ほむらちゃん…？」

その間にほむらが出てきた。

続く

第十四話（後書き）

クロウ登場です！いやー、このタイミングで出したかった自分です（笑）でもちよつと性格ちがうかな…？

第十五話（前書き）

アニメ6話のお話スタートですね！ただ、ちょっと魔法少女の方が優遇されてるかも…

第十五話

杏子と【BF・アーマード・ウィング】の間にほむらが出てきて戦いを止めたのだった。

「なんだ？アイツは…」

「な…何しやがったんだ！？てめえ！」

槍をほむらに向けるが、ほむらは瞬間移動したかのように杏子の後ろにいた。

「なっ！？」

この光景をみて遊星たちは驚きを隠せなかった。

「ふうん、あんたがキュウベえが言ってたイレギュラーかあ」

「ち！邪魔するな！」

さやかはほむらに攻撃をしかけるが、また瞬間移動をしさやかを気絶させた。

「さやかちゃん！」

この時、杏子の魔法はとかれ、遊星とまどかはさやかのそばに行った。

「何しやがんだ、てめえ！！」

クロウは【BF・アーマード・ウイング】に攻撃を指示し、【BF・アーマード・ウイング】はほむらに攻撃を仕掛けにいった。しかし、またもや瞬間移動をし、攻撃をかわした瞬間【BF・アーマード・ウイング】は爆発してやられたのだった。

「なに！？」

「なんだ？あんだ、どっちの味方だ？」

「私は冷静な判断をする人の味方で無駄な争いをするバカの敵。貴方はどっち？佐倉杏子」

「…どこかであつたか？」

「さあ？」

「…まるで手札が見えねーな。ま、今日のところは退いてやるよ」

「賢明ね」

そして杏子はすぐさまどこかへ行った。

「ほむらちゃん…」

「何度忠告すれば気が済むの？貴方はどこまでおろかなの？」

「ひっ！」

ほむらの気迫に圧倒されるまどかを見てクロウは黙っていられなか

った。

「おい！なんでそこまで言う必要があるんだよ？」

だが、ほむらはそのまま黙ってどこかへ行った。

「な！待ちやがれ！…畜生！！」

「…暁美ほむら、彼女は何が目的なんだ…？」

その後、遊星はクロウを連れてマミの家に帰り、クロウに魔法少女のことを話した。

「なるほど…。さっきのさやかと杏子、そしてほむらってやつも魔法少女か…」

「ああ」

「それである佐倉杏子とか言うやつは何者なんだ？」

「マミは知ってるのか？」

「ええ、あの子はちょっと野蛮なところもあるけど本当はいい子なのよ」

「ほんとかよ…」

「だが、俺が気になってるのは暁美ほむらだ。彼女の目的が未だにわからないしな…」

「アイツは今度会った時はアーマード・ウィングの借りを返してやるぜ！」

よほど自分のエースモンスターがやられたのが悔しいのか、クロウは少し興奮をしていた。

「それで、美樹さん大丈夫かしら…」

「今のさやかじゃ、杏子にもほむらにも太刀打ちできないからな…。もうしばらく、様子を見るか…」

「もし何かあれば、私も遊星さんに付き合いますよ」

「ああ、その時は頼む」

そして翌日、遊星は今日も修理屋の仕事でゲームセンターにいた。

「さて、次は…」

修理も終え、次の仕事に行こうとしたその時

「…！」

ゲームをしている杏子とほむらがいた。それを見た遊星はすぐさま隠れ、様子をうかがった。

『よお、なんのようだ？』

『この街を貴方と巴ミミ、不動遊星とその仲間たちに任せたい』

『ふうん、どという風の吹き回し？』

『美樹さやかじゃ、務まらないわ。貴方みたいな子がふさわしいわ』

『ま、そのつもりだけどね…。それで、さやかってやつどうすんのさ。』

『私が何とかするわ。だから貴方は何もしないで』

（さやかを狙うつもりか？）

『そういえば、肝心なこと聞いてなかった。あんた何者だ？』

『…この街に2週間後、ワルプルギスの夜が来る』

（ワルプルギスの夜…？）

『なぜわかる…？』

『そいつを倒せば、私はこの街を出る。でも1人では…』

『なんなら、あたしも協力しようか？マミと遊星たちと協力して。そうすればなんとかなるだろ？』

すぐさま、遊星はその場を立ち去って次の仕事に向かった。ほむらの言っていた『ワルプルギスの夜』が気になっていた。

（ワルプルギスの夜・・・、それがほむらの目的だと言っのか…？）

続く

第十五話（後書き）

さやかと杏子に関しては生存ルートどう作るか検討中です（^^）

第十六話（前書き）

最後のところであのモンスターが…！

第十六話

マミの家では…

「このコーヒーはうまいな…。ブルーアイズマウンテンよりはうまい…。おかわり！」

「はい」

ペシッ

「！何をするのだ、クロウー！」

「ジャック！てめえ何杯コーヒー飲んでんだよ！これで12杯目だぞ！」

「何を言っている。俺は新たな戦術を考える為、閃きを求めて珈琲を飲んでいたのだ！それに巴が何杯も飲んでもいいとってたのだぞ！」

「いくらなんでも限度っつーもんがあるだろうが！…たく…マミも大変じゃないのか…？こんなアホに…」

「あら、私はにぎやかでいいと思ってるからそんな迷惑なんて思っていないわ」

「…ま、それもそうか…。」

とクロウはどこかへ出かけようとしていた。

「クロウさん、これからどちらへ？」

「俺も職を探す。遊星ばかり働かせるわけにはいかなーしな」

クロウは家を出て職を探しに行った。

「クロウさんも働き者ね…。あ」

するとソウルジェムが光りだした。

「魔女退治の時間ね…」

「なら行くか…」

その頃、さやかとキュウベえは昨日遊星と一緒に使い魔と戦った場所にいた。

「もう他に魔女の気配はないね…」

「そう…」

するとまどかが来た。

「ねえ、さやかちゃん…。このまま魔女退治続けてたら、昨日の子と会っちゃうんじゃないの…？」

「まあ、当然そうなるだろうね」

「だったら、先に会ってお互い話し合いすれば…、そしたら昨日み

たいな喧嘩に…」

「喧嘩ねえ…。タベのあれがまどかにとって喧嘩に見えたの？あれは真正銘殺し合いだよ。お互いなめてかかってきたのは最初だけ。途中からあたしもアイツも相手を終わらせようとしてた。」

「そんなのなおさら駄目だよ…」

「だからって話し合えて？バカいわないで相手はグリーンフシード欲しさに人間をえさにしようとしてるやつなんだよ！どうやって折り合いつけるって言うの？」

「さやかちゃんも魔女をやっつけるために魔法少女になったんでしょ？あの子は魔女じゃない、同じ魔法少女なんだよ。魔女を退治したいと思う気持ちは同じでしょ？ほむらちゃんも！前に遊星さんがいったでしょ？わかちあう心があれば、お互いわかりあえるって…」

「そんなわけない！まどかも見てたでしょ？アイツはグリーンフシードが欲しいから、人間なんてどうでもいいって思ってるんだよ！」

「そんなの…ちがうよ…」

「あの転校生も昨日の杏子ってやつも自分の都合しか考えてない！…今ならわかるよ。マミさんや遊星さんたちだけが特別なんだ。他の魔法少女だって皆あんなやつらばかりだよ！」

「そんな…」

「次に魔女が狙うのは…まどかのママやパパ、タツ君かもしれない

んだよ！…あたしはただ魔女と戦うだけではなく、大切な人を守るためにこの力を望んだの。そんなひどい人間がいたら、あたしは戦うよ！たとえそれが魔法少女でも！」

そういつてさやかはどこかへ行った。そしてまどかは泣きながらもキュウベえに説得しようと言った。

「キュウベえも何とかいつてよ…」

「僕から言わせておけば、無謀すぎることだけだよ。今のさやかじや暁美ほむらにも佐倉杏子にも勝てない。でもさやかは聞き入れてくれないよ…」

その頃…マミとジャックは魔女退治をしているが、かなり苦戦をしていた。

「く…！」

「ジャックさん！」

「くそ…【レッド・デーモンズ・ドラゴン】でもやっと互角なのか…！」

今回の魔女は【レッド・デーモンズ・ドラゴン】と同じ力をもっているようだった。その魔女はまるで竜の形をしたものだった。

「このままじゃ…」

「…ふ、ならばこちらにもさらなる力を見せてやる！」

ジャックはデッキからカードを1枚ドロ―をした。

「魔法、コール・リゾネーター発動！デッキからリゾネーターとな
のつくモンスターを手札に加える！俺が加えるのは【クリネイト・
リゾネーター】！さらにこいつは自分の場にシンクロモンスターが
いる時特殊召喚ができる！チューナーモンスター【クリネイト・リ
ゾネーター】を特殊召喚！さらにこのモンスターは【レッド・デー
モンズ・ドラゴン】がいる時、特殊召喚できる！チューナーモンス
ター【レッド・ノヴァ】を特殊召喚！」

そしてジャックの場には【レッド・デーモンズ・ドラゴン】と2体
のチューナーモンスターがいた。

「2体のチューナー…！？」

「荒ぶる魂、バーニング・ソウル…！」

ジャックの痣が赤く輝きだした。

「レベル8【レッド・デーモンズ・ドラゴン】にレベル3【クリネ
イト・リゾネーター】とレベル1【レッド・ノヴァ】をチューニン
グ…！」

2体のチューナーモンスターは炎の輪となり【レッド・デーモンズ・
ドラゴン】はぐり、その炎の輪が【レッド・デーモンズ・ドラゴ
ン】を包んだ。

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあ
げよ。シンクロ召喚！いでよ、【スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン】
！」

炎の中から出てきたのは真紅色に染まった竜^{ドラゴン}。ジャックのエースモンスター【スカーレット・ノヴァ・ドラゴン】だ。

「【スカーレット・ノヴァ・ドラゴン】…!?!」

マミは【スカーレット・ノヴァ・ドラゴン】のオーラにただ圧倒されているだけだった。

「いけ! 【スカーレット・ノヴァ・ドラゴン】! バーニング・ソウル!!」

炎に包まれ、【スカーレット・ノヴァ・ドラゴン】は一気に魔女に攻撃をして、魔女を倒した。そして、結界は元の世界に戻った。

「これがバーニング・ソウルだ!」

「なんかもう圧倒されちゃったわ…」

「ほら、グリーンフシードだ」

ジャックはグリーンフシードを拾い、マミに渡した。

「ふふ、ありがとう」

今後もこのコンビはまだ、活躍するようだ。

続く。

第十六話（後書き）

紅蓮の悪魔だしちゃった…（汗）

流れ星出す前に…！

第十七話

家に帰った遊星は3人にほむらの目的の話をした。

「ワルプルギスの夜？」

「ああ、今日ゲームセンターのゲームの修理をした後、ほむらと杏子がいてそういつていた」

「ふむ、ところでそのワルプルギスの夜って一体なんだ？」

「他の魔女とは比べ物にならない、超大型の魔女のことよ。でも魔法少女1人じゃ、太刀打ちできない魔女よ…」

「それでほむらは杏子と俺達で協力するという話があったんだが…」
とクロウは不機嫌な顔をした。

「俺は却下だ」

「クロウ？」

「アイツはさやかにひどいことして、俺のアーマード・ウィングまで潰しやがったんだからな！そんなやつと組めるか！」

「そうね、私も協力は…」

「遊星はどうするつもりだ？」

「…俺もまだ考えてる。彼女がまだ何者かもわかってはいないしな…」

そんなこんなで翌日。さやかは今日も病院に行き、恭介のお見舞いに来ていた。しかし、部屋に行くと誰もいなかった。

「あら、上條さんなら退院しましたよ」

通りかかった看護婦が言った。その夜、さやかは恭介の家の前に来た。インターホンと鳴らそうとした時、バイオリンの音がした。

「あ…」

きつともう大丈夫だろう…。そう思って鳴らそうとはしなかった。

「友達の家か？」

すると誰かが声を掛けてきた。その方向を見るとクロウがいた。

「クロウさん」

「遊星から聞いたよ。魔法少女の願いで友達の怪我を治したんだってな」

「はい」

「きつと言ってるだろうな。大好きなバイオリンが弾けて嬉しいだろうな」

「そうですね…」

「夜遅いし、家までおくってやるよ」

「ありがとうございま…あ！」

さやかが向いた先にお菓子を食べている杏子がいた。

「お前は…」

「佐倉杏子…！」

「よお、会いもしないで帰るのかよ。知ってるよ、この家、坊やの家なんだろう？まったく、くっだらねえことで願いを使いやがって…」

「てめえ！」

「お前に何がわかる…！」

「わかってねえのはそつちだ、バカ！願いつて言うのは自分だけのものだけに使うためにあって他人のために使うなんてろくなめにあわねえよ！」

「てめえにさやかの何がわかるんだよ！」

「ふん、赤きシグナーのくせしてほんとにバカだな」

「んだと！？」

さやかとクロウからは杏子への怒りがどんどんわきでていた。

「なんなら、あたしが坊やをやるつか？そうすれば坊やの身や心は全部あんたのものになるんだし」

「お前だけは絶対に許さない…！」

「俺もだ！さやかの願いを侮辱しやがって…！」

「場所を変えようぜ。ここじゃ人目につく」

その頃、まどかは家で勉強をしているところに…

（まどか、まどか！）

窓の方を見るとキュウベえがいた。

（急いで！さやかが危ない）

そしてさやかとクロウ、杏子は歩道橋で勝負をしようとしていた。

「今度こそ、決着をつけようぜ！クロウ！さやか！」

そして杏子は魔法少女に変身をして、クロウはデッキをセットしカードを5枚ドローをした。

「いくぞ、さやか！」

「はい」

さやかも魔法少女に変身しようとするその時、まどかとキュウベえがやってきた。

「待つて！さやかちゃん！」

「まどか…！邪魔しないで！これはあたしたちの戦いだから！」

「ふん！うざいやつにはうざい仲間がいるもんだね！」

「なら、あなたの仲間はどうかしら？」

杏子の後ろにほむらがいた。

「アイツは…！」

「話が違っわ。美樹さやかには手をださないでと」

「あんたのやり方が手ぬるすぎんだよ！」

「なら、私が何とかする」

「ふん、こいつが食い終わるまでまってやる」

「十分よ」

「ち、なめやがって！アーマード・ウィングの借りを返してやるぜ
」！」

「あたしも…！」

「！さやかちゃん、ごめん！」

さやかは変身しようとした瞬間まどかがさやかのソウルジェムを奪い、歩道橋の下に落とした。

「！」

シュン

するとほむらは何かに反応したかのように消えた。

「なんだ？自分から逃げたぞ…？」

「まどか、あんたなんてことを・・・！」

「だってこうしないと…？さやかちゃん？」

するとさやかは倒れこんでしまった。

「お…おい？さやか？」

「さやかちゃん？」

「今のはまずかったよ。友達をほおりなげるなんてどうかしてるよ」

「なに？なんなの…？」

杏子はさやかを掴み取った。

「…どうなってんだ？コイツ死んでるぞ！」

「なに！？」

「え!？」

杏子の言葉を受け、まどかとクロウは驚いた。

「お…おい!さやか、嘘だろ…!？」

「さやかちゃん…!」

「一体…どうなってるんだ…？」

「おい!キュウベえ!一体どうなってるんだ!?!さやかが死ぬなんて!」

「はあ、それはただの抜け殻だよ」

「抜け殻…!?!どういう意味だよ!?!」

「さやかは今、まどかがほおりなげたじゃない」

「ほおりなげた…ってソウルジェムのことか？」

「そう、普段は肌身離さず持っているからこういう事故はめったに無いんだけどね。壊れやすい体で魔女と戦ってくれなんてとてもお願いできないよ。君たち魔法少女にとって体は底付けのハードウェアじゃないんだ。君たちの本体の魂は魔力を公立できるコンパクトなソウルジェムなんだ。僕の役目はね、君たちの魂をぬきとってソウルジェムに変えることさ」

「てめえは…なんてことを!ふざけんじゃねえ!それじゃあ、あた

したちゾンビにされたようなもんじゃねえか！」

「むしろ便利だろ？どんなに体が引き去れようが魔法で治せば。ソウルジェムが砕かれない限り、君たちは無敵だよ」

「なんで最初から言わなかったんだよ！？」

「聞かれなかったからさ」

「そんな重要なことは先に言っとくべきだろ！」

「はあ、君たちはそう、どうして命のありかたにこだわるのさ、わけがわからないよ」

「ぐぐ…！てめえ！」

その時、ほむらが戻ってきて、さやかのソウルジェムをさやかの手元に戻した。

「あ…！」

すると、さやかは起き上がり、あたりを見回すと一体何がおきたのかわからない状態だった。

「ねえ、なんなの？」

続く

第十七話（後書き）

これで6話終わったか…。次は水曜日ごろ更新予定です

第十八話（前書き）

ゾーンとの最後のデュエル最高だった…！

てか次回は未来のお話！？

みんなの未来はどうなってるのだろうか…？

そしてそんなこんなでまどか マギカ7話のお話スタート！そろそろ緑ちゃんもいじりたくなったので…（何！？）

第十八話

家に帰宅したクロウは遊星たちにソウルジェムのことを教えた

「ソウルジェムにそんな秘密が…」

「ああ、全部キュウベえから聞いた」

「となると、今のマミは死んでると言うのか…？」

「マミ、キュウベえから聞いてなかったのか？」

クロウの質問に動揺しつつ、マミは頷いた

「くそ！なんだよ、アイツは！？人の命をこんなものに変えやがって！」

「クロウ…」

ソウルジェムのことを聞いた遊星たちはただ沈黙をするだけだった。魔法少女になった以上、どうすることもできなかった。

翌日、さやかは学校に来ていなかった。よほどショックを受けたのだろう…。昼放課、まどかとほむらは屋上で昨日のことでお話をしていた。

「ほむらちゃんは知ってたの？」

「ええ、アイツはそういうやつなのよ。人の命をなんとも思っ

い…」

「…」

「鹿目まどか」

「な…なに？」

「どうして、キュウベえが不動遊星たちを導いたと思う？」

「え…？それは力を貸して欲しいから…って言ってたよ」

「不動遊星たちが戦えば戦うほど、私たち魔法少女の魔力が上がり、やがて魔法少女も強くなっていくの。だからキュウベえは世界の運命を変えた不動遊星をはじめ、赤き竜のシグナーをこの世界に導いた」

「でも、それはいいじゃないのかな…？魔法少女たちが強くなれば…」

「魔法少女たちも強くなれば、やがてとんでもないことが起こるの…」

「とんでもないこと…？」

そして何も言わずにほむらは教室に戻って行った。

「ほむらちゃん…」

そして放課後の帰り、まどかは仁美と一緒にとあるハンバーガーシ

ヨッブにいた。

「そういえばまどかさんはイケメンの修理屋さんはご存知ですか？」

「イケメンの…？」

「はい、最近女子で噂になってますの。ある日、彗星のごとくその修理屋さんが現れたのです。その人はイケメンでなんでも修理できてとても優しいお方でしてよ」

「へー、一体どんな人なのかな…？」

「なにやら赤いバイクに乗っていて、青いジャケットを着ていて、左目の下々に黄色いラインのような模様が書かれてることです」

これを聞いて、まどかはなにか心に引っかかった。

「それってまさか…」

「もしかして知ってますの!？」

「ええ…と…」

「まどか？」

「あー!」

偶然にも、遊星がいた。

「遊星さん、どうしてここに？」

「ここの修理を頼まれてここに来た」

「そうなんですか」

「まあ！」

仁美は遊星を見たたん、口を両手で抑えて、びっくりしていた。

「まどかさん、そちらの方は…まさか…！？」

「えっと…、さっき仁美ちゃんが言ってた…」

「不動遊星だ。よろしくな」

「あ…ああ、あなたが…」

やはり、まだ動揺してるようだった…。遊星は仁美を心配そうに見ていた。

「おい…、どうした…？」

すると仁美は遊星の手を両手で握った。

「！？」

「初めまして、志筑仁美です！あなたが噂の修理屋さんですよ！？」

「噂かどうかは知らないが、修理屋の仕事をしているが…」

「その、遊星さん…。私とお付き合いしてください！」

「え！？」

突然の告白で遊星は驚いた。この時、どういったらいいか、わからなかった。

「いや、その…」

（あの冷静な遊星さんが照れてる…のかな？）

まどかは今の遊星の姿を不思議な顔をして見ている。すると仁美は腕時計を見て

「あら、もうこんな時間。ごめんなさい、これからお稽古の時間です、遊星さんのお答えはいつでも待ってます。では、ごきげんよう」

仁美はそのままさっさと帰ってしまった。いまいち状況についてこない遊星だった。

「まどかの友達って…」

「あははは…」

まどかもどうすればいいかわからなかった…

続く

第十八話（後書き）

うーん、なんかこんな感じでいいかな…？

仁美を遊星にくっつかせた理由はさやかと恭介を幸せにしたいからです（アキさん、ごめんね…）

第十九話（前書き）

まどマギ10話はほむらの過去でしたね。やはりほむらの目的はまどかの未来を変えることでしたね…。

第十九話

職を見つけ、自分の世界でもやっていた宅配をしていたクロウはこの世界でも宅配の仕事をしていた。

「さて、これで…」

どうやら終わったようだ。帰ろうとしたその時…

「あー！」

「よう」

目の前に杏子がいた。

「なんのようだ？また戦うのか？」

「いや、そんなつもりはない。ちょっとあたしについてきて」

「？」

おそろおそろ杏子についていくクロウ。着いた場所は…。

「ここって、さやかの家じゃねえのか？」

「そう、アイツにちょっと話があって」

「話？」

家のなかにいるさやかは…

「こんな身体になっちゃって、あたし…、どんな顔して恭介に合えば…」

（いつまでもショボくてんじゃねーぞボンクラ！）

「！-！」

誰かから声が聞こえた。さやかにはこの声が聞き覚えがあった。窓から見ると杏子とクロウがいた。

（ちよいと面貸しな。話がある）

杏子はさやかとクロウを連れて、森の中を歩いていた。

「どこに行くんだよ？こんなとこまで…」

「まあ、ついてきなつて。それと…あんたさ、後悔してるの？こんな身体にされちゃったこと」

「……」

「あたしはね、まーいいかって思ってるんだ。なんだかんだでこの力で好き勝手できてるし」

「そんな勝手な…」

「自業自得でしょ、あんなのは…」

そんな会話が続き、荒廃された教会についた。

「教会？なんでまた…」

「入りなつて」

その教会に入った。

「…ちよいとばかり、長い話になる…」

杏子はクロウとさやかにりんごを渡した。

「食うかい？」

すると、さやかは渡されたりんごを捨てた。その瞬間、杏子はさやかの胸ぐらをつかんだ。

「食い物を粗末にするんじゃない！殺すぞ！」

「おいおい、今日は話があるから呼んだんじゃないかよ？さやかに手をだしたら俺がお前を倒すぜ？」

クロウは平然とりんごを食べていて、杏子はさやかを離し、りんごを拾った。

「ここはね、あたしの親父の教会だった」

「お前の親父さんの？」

「ああ」

そして杏子はクロウとさやかに自分の過去のことを話した。自分の家族、自分の願いをすべて話した。

「そうか、だから昨日さやかの願いを否定したのか」

「ああ、奇跡つてのはタダじゃない、希望を祈った分だけ同等の絶望が撒き散らされる。そうやって差し引きゼロにして世の中は成り立ってるんだよ。あんたもあたしと同じ間違いから始まった。あんたはこれ以上後悔するような生き方をすべきじゃない。対価として高すぎるモンを払っちゃってるんだ。これからはつり銭を取り戻すことを考えるよ」

「…あたし、あんたのこと誤解してた。そのことは謝るよ、ごめん。でもね、あたしは人のことを祈ったことを後悔しない。高すぎるものを支払ったと思ってない。この力、使い方次第でいくらでもできるはずだから」

「！…なんで…あんたは…」

「俺もそうだ。俺もさやかと同じく自分のために戦わねーよ。仲間のために、人のために今まで戦ってきたんだ」

「クロウ…！」

「それで、そのりんごどこで手に入っただの？お店で払ったお金はどうしたの？」

「！」

「いえないんだね、ならそのりんごもらえないよ」

「あ、俺食べちゃったよ……」

「バカやろう！あたしたちは魔法少女なんだ！他に同類なんていないだぞ！」

「あたしは自分のやり方で戦い続けるよ。それがあんたの邪魔になるなら殺しにすればいい。あたしは負けないし、後悔なんてしないよ。行こう、クロウさん」

「ああ」

「……！！」

続く

第十九話（後書き）

11話が気になって仕方が無い自分でした…。本当にどうなるんだろ…。まどマギ…

第二十話（前書き）

金曜日の地震大丈夫でしたか？（今頃！？）こちらの地区は大丈夫でした。

第二十話

夕方、遊星はマミと一緒に帰っていた。

「ソウルジェムにあんな秘密があるとは思わなかった…」

「私も。でも、私は後悔はしてないわ。どの道キュウベえに会って
いなかったら、私はあの事故で亡くなってた…」

「そうか」

「遊星さんはこれからも私のことを仲間だって…」

「どんな姿だろうが、マミは俺の仲間だ。さやかだって魔法少女で
普通の人間じゃなくても、俺の仲間に変わりは無い」

「ふふ、遊星さんらしい…」

そしてその翌日、遊星はいつもどおり修理屋の仕事のため現場にむ
かった。行く途中まどかたちに出会った。

「あ、遊星さん、おはようございます」

「おはようございます」

「おはよう、まどか、さやか」

「あ…！おはようございますー！」

「ああ…、おはよう仁美」

「今日も仕事ですか？」

「ああ、これからな」

「その…遊星さんがんばってください！」

すると仁美が大声で遊星を励ましていた。

「ああ…、じゃ、またあとで」

そのまま遊星はD・ホイールを走らせ、行ってしまった。その後、まどかとさやかはテレパシーで会話した。

（ねえ、仁美どうかしたの？）

（実は、昨日遊星さんに会って、仁美ちゃんが遊星さんのこと好きになっちゃって…）

（そうなの！？）

「あの…」

すると仁美が2人に声を掛けてきた。

「まどかさんとさやかさんは遊星さんとはどういう関係なの？」

「ああ…ええ…と…」

「友達関係だよ。友達関係…」

「まあ、そうですね？なら、後で遊星さんのこと詳しく教えてくださいませんか！？」

「あ…うん」

（凄い熱心だね…）

「あら、上條君、退院なさったんですの？」

「あ…」

そして教室にて…

「さやかちゃんも行ってきなよ。まだ声かけてないんでしょ？」

「あたしは…いいよ」

「さやかちゃん…」

学校の授業が終わり、放課後、さやかはいつものように魔女退治に行こうとした。

「今日の魔女退治もついていいかな？」

目の前にまどかとクロウがいた。

「…まどか、クロウさん…」

「今日は俺も行くぜ！」

「さやかちゃんに1人ぼっちになってほしくなくて、だから…」

「…なんでまどかとクロウさん、そんなに優しいかな？あたしにはそんな価値無いのに…」

「確かに、お前は人間じゃない…。けど、まどかや学校の連中もお前の友達に変わりはないよ。どんな姿だってさやかはさやかだ…」

「クロウさん…」

「クロウの言うとおりだ」

今度は遊星が来た。

「遊星さん…」

「さやかがどんなに変わろうとも、俺たちの仲間に変わりは無い。まどかだってさやかのことは友達だと思っているんだ」

「そうだよ。魔法少女になっても、私はいつまでも友達だよ」

「皆…。こんなあたしのために…ゾンビになったあたしのために…」

みんなの言葉を受け、涙をながした。そして、魔女退治に行き、その様子を杏子とほむらが見ていた。

「今日のアイツは魔女と戦っている。無駄な狩じゃないさ」

「意外だわ、そんな理由であなたが獲物を譲るなんて」

「ふん、クロウや遊星がいりやなんとかなるでしょ…」

そして魔女と戦っている遊星たちは、苦戦をしていた。

「く…！」

「さやかちゃん！」

「よくも…！【BF - 疾風のゲイル】を召喚！レベル5【暁のシロツコ】にレベル3【疾風のゲイル】をチューニング…！」

【BF - 疾風のゲイル】は3つの輪となり、【BF - 暁のシロツコ】がくぐる。

「黒き疾風よ！秘めたる想いをその翼に現出せよ！シンクロ召喚！舞い上がれ、【ブラックフェザー・ドラゴン】！」

出てきたのは白い羽の翼を持った竜^{ドラゴン}。クロウのエースモンスターにして、赤き竜の竜^{ドラゴン}、【ブラックフェザー・ドラゴン】だ。

「【ブラックフェザー・ドラゴン】で攻撃！ノール・ストリーム！…！」

【ブラックフェザー・ドラゴン】の放った黒い光線が魔女に炸裂した。

「よし…！」

「…邪魔しないで…」

「あ…！おい…！」

さやかはそのまま魔女に攻撃を仕掛けに行った。魔女に攻撃をしつつもさやか自身も全身が傷だらけであった。

「あんな身体で大丈夫なのか…？」

「あはは…！本当だあ…その気になれば、痛みなんて完全に消しちやえるんだあ…」

さやかは攻撃をやめることなく魔女に攻撃し続けた。

「もう、やめて…！」

続く

第二十話（後書き）

今気づきましたがスターダスト一回しか登場してない…！

第二十一話（前書き）

いよいよまどマギ八話の話だよ…。さやか…

第二十一話

さやかは魔女に激しい攻撃をしていた。魔女が弱まろうとも構わずに攻撃をしていた。

「さやか…」

「やり方さえわかっちゃえばこっちのもんだね。もう負ける気がないわ」

戦いで負っていた傷も魔法で回復をし、さらに攻撃をしていった。そして結界も崩れ始め、やがて元の世界に戻った。

「魔女をやつつけたのか…」

「さやかちゃん…」

すると、さやかの目の前に杏子がやってきた。さやかは不敵な笑みを浮かべ、グリーンシードを杏子に渡した。

「あげるよ、そいつが目当てなんですよ？」

「おい…！」

「これで借りはチャラ、いいわね。さ、帰ろう。まどか、遊星さん、クロウさん」

魔法少女姿から元の姿に戻り、疲れで倒れかけたところをまどかが支え、ゆっくりと歩いた。

「…あのバカ」

雨が降り始め、遊星たちはとあるバス停にいた。

「さやか…、あんなのでよかったのか？」

「グリーンシードも杏子にあげちゃうし」

「……」

さっきのさやかの魔女との戦いでまどかはさやかの様子をとて悲しく感じた。

「さやかちゃん、あんな戦い方ないよ…。痛くないから傷ついてもいいなんて、そんなの駄目だよ」

「…ああでもしないと勝てないんだよ…。あたし、才能ないから…」

「それで勝ったとしても、さやかちゃんのためにならないよ…」

「…あたしのためって何？魔女を殺すことしか意味のない石ころのあたしになにがためになるっていうの？」

「俺たちは、さやかのために何かできることをしているじゃねえか！」

「そつだよ、私はどうすればさやかちゃんが幸せになれるか考えて…」

「だったら、あんたが戦つてよ！！…キユウベえから聞いたわよ。あんた誰よりも才能あるんでしょ？遊星さんより強くなれるんでしょ？あたしのために何かしようつて言うなら、まずあたしと同じ立ち場になってみなさいよ！無理でしょ？ただの同情で人間やめられるわけないよね！」

「お…おい…！」

「さやか、今のはいいすぎだ…！」

「遊星さんたちもなんなの？仲間だからってあたしを見捨てられない？そんな同情で慰めたつもりなの？」

「ち…違つ！俺たちはただ…」

「なんでもできるくせに…！何もしないまどかの代わりにあたしがこんな目にあつてるの！知つたような事いはないで！」

そのままさやかは家に帰ろうとして、まどかは追いかけようとするが、ついてこないでつと言われ結局さやかは一人雨の中消えていった。

「さやかちゃん…」

「…気にするな。アイツも本気であんなこと言ってるわけはねーよ」

「…さやか」

まどかを家まで送っていき、マミの家に帰宅した遊星とクロウはさやかのことをすべてマミに伝えた。

「そんなことが…」

「ああ、さやかがますます自分を責めるようになってきちゃったんだ…」

「美樹さんが…」

「そういえば、前から気になったんだが、ソウルジエムは魔力を使うほどにこるといつていたが、最終的ににこりきったソウルジエムはどうなるんだ？」

「…わからない。でも、キュウベえはとんでもないことになるって言っただけで…」

「…くそ！アイツもなんで全部教えてくれないんだよ…」

翌日、今日もさやかは学校を休んでいた。さやかのことが心配になったまどかは放課後、さやかの家にいったのだが…

「え？昨日から帰ってないんですか…？はい…、わかりました…」

家には帰っておらず、どこかにさまよっているようだ。

「遊星さんに…」

急いで携帯で遊星と連絡した。

『まどか、どうしたんだ？』

「遊星さん、さやかちゃんが家にいないんです！今日も学校休んでましたし」

『なに！？』

「それで、さやかちゃんを捜してほしいんです…」

『…わかった、俺もジャックとクロウとマミに連絡してから探す』

「はい」

すぐに携帯を切り、さやかを捜しに行った。

そして遊星もまた、ジャックたちに連絡をし、さやかを捜していた。
D・ホイールから降りて、とある広場にてさやかを捜す。

「どこにいるんだ…。さやか…」

「あら？遊星さん？」

すると、偶然仁美にであつた。

「仁美」

「こんなところで何をしているんですか？」

「いや、ちょっとな…」

「？ま、いいですね。ちょうど私も遊星さんを捜してまして」

「なんだ？」

「遊星さんにお話がありまして」

そういつて2人はベンチに座った。しかし遊星はこんなこととする場合か？

「それで、以前の告白の答えは…」

以前の告白と聞いて遊星は思い出した。ファーストフード店で仁美に告白された。あの日のことを思い出した遊星は少し照れていた。しかし、遊星は冷静に言った。

「…すまない…」

「え…？」

「俺は…この世界の人間じゃないんだ…」

「それは…どういことですか？」

遊星は自分の世界、デュエルモンスターズ、D・ホイール、モーメントそして五千年前の赤き竜と星の民の伝説とその竜を教えた。それでも、魔法少女のことにに関しては口をださなかった。今、さやかがひどい目にあわされているのだから、ここで親友を悲しませたくない…という思いでいっぱいだった…。

「…そういつわけだ…。疑うかもしれないが…」

「…すばらしいわ」

「え!？」

予想外の答えに少し戸惑った。

「そんな世界の人だったなんて…。遊星さんは本当にすごいお方ですわ」

「疑わないのか？」

「疑うも何も、遊星さんがうそを言ってるような人には見えないもの。さっき見せてくれた【スターダスト・ドラゴン】だって、この世のものとは思えない美しい竜でしたから。あんなの見た上で信じますよ」

「…ほんとに、君にはかなわないな…」

「ふふ、そういつてもらえると嬉しいです。それでは、これからお稽古なので失礼します」

「ああ」

仁美は帰っていった。その後、遊星はさやかを捜しに行った。

その頃、クロウもまた、さやかを捜していた。

「くそ、どこにいったんだ…？」

「さやかを捜してんだろ？」

「杏子…」

「あたしも手伝うよ。今のアイツを放っておいたら大変なことになるから」

「大変なこと…?」

「曉美ほむらがそういつてたんだよ」

「わかったよ、じゃあ一緒に捜そうぜ」

クロウと杏子は一緒にさやかを捜しに行った。

続く

第二十二話（前書き）

やはり、双子とアキさんまだですので更新を再開します！

第二十二話

「うわあああああ!!」

まどかや遊星たちがさやかを捜してる中、さやかは魔女退治をしていた。そして魔女を倒し、元の世界に戻っていった。さやかのソウルジェムは黒く染まっていた。すると、後ろからほむらが来た。

「どうしてわからないの？ただでさえ、余裕が無い状況なのに、魔女だけを狙いなさい。もうソウルジェムは限界のはずよ。使いなさい」

ほむらはグリーンフィードをさやかにゆずったが、さやかはそれを捨ててしまった。

「今度は何をたくらんでるのさ」

「いいかげんにして、もう他人を疑ってる場合じゃないでしょ。あなた、このままだと死ぬわよ」

「あんたたちとは違う魔法少女になる。あたしはそう決めたんだ。誰かを見捨てるのも利用するやつとつるむつものもいやだ。見返りだっていらぬ。もし魔女が殺せなかった時は…あたしは用済みさ。魔女に勝てないあたしなんてこの世界にはいらぬ」

「……私はあなたを助けたいのにどうして信じてくれないの？」

「あんたが嘘つきからだよ。あんた、遊星さんやジャックさんと違って何もかも諦めた目をしてる。いつも空っぽの言葉をしゃべって

る。本当はさ、あたしのためとか言いながら別のことを考えてるでしょ？ごまかしきれもんじゃないよ、そういうの」

「そうやって、まどかをますます苦しめてる」

「まどか…関係ないでしょ」

「いいえ、なにかもあの子のためよ」

そしてほむらは魔法少女の姿に変身した。

「あなたって鋭いわ、ええ、図星よ。私はあなたを助けたいわけじゃない。あなたが破滅していく姿をまどかに見せたくないだけ。ここで私を拒むならあなたは死ぬしかない。これ以上まどかを悲しませるくらいなら…この場で私が殺してあげる。美樹さやか」

ほむらはさやかを殺そうとした瞬間、杏子とクロウが来てほむらを取り押さえた。

「おい！さっさと逃げろ！」

杏子の言葉のとおり、さやかはすぐさまどこかへと消えていった。

「正気か、てめえは！アイツを助けるんじゃないのか？」

「それに、まどかのためってどういうことだよ？」

「離して」

「ふん、なるほどね。こうやってとっつかまれてりゃあの妙な技も

できないってわけか」

すると、ほむらの手元に手榴弾が出てきてそれにきずいた杏子とクロウはその場を離れ、ほむらはピンをはずし爆発させた。けむりをはらった後、ほむらはいなくなってた。

「手榴弾…って、なんであんなもってんだよ！？あれもあいつの魔法なのか…！？」

その頃、さやかを捜し続けてる遊星は…

「どこにいったんだ？さやか…」

すると噴水広場のベンチにまどかとキュウベえがいた。すぐさま遊星はまどかの方に行こうとしたが、まどかの話し声をかすかに聞こえた時、ピクリと止まった。

『前にわたしがすごい魔法少女になれるって話、あれは本当なの？』

『すごいだなんて控えめな表現だ。君はとほうもない魔法少女になれる。この世界で最強の魔法少女に』

『どうして私なんか…』

『僕にもわからない。君が秘めている潜在能力は理論的にありえないものだ。誰かに聞きたい気持ちは僕も一緒だ』

『そっなの…？』

『君が力を解放すれば、奇跡を起こすどころか、宇宙の法則さえねじまげてしまうのも可能だろう。それに、世界の運命を変えた遊星の力さえも超えてしまう』

（俺の力よりも…）

これを聞いた遊星は考えた。もしそうなら赤き竜、そしてかつて戦った地縛神、星界の三極神、機皇帝、そして時戒神を上回るのかと…。そう考えるとやはり心強いと思ってしまった。

『キュウベえに出来ないことでも私ならできるのかな…？』

『というと？』

『私があなたと契約したら、さやかちゃんの身体を元に戻せる？』

『造作も無いだろうね。君にとってそれは魂を差し出すに足るものなのかい？』

『いいよ、さやかちゃんのためなら、わたし、魔法少女に…』

この時、遊星はまどかが魔法少女になる…、そう確信した。

だが、その時…

バキュウン

「！！」

銃声になり、その瞬間キュウベえは全身穴だらけになり、死んだ。

その後、まどかのところに銃を持った魔法少女姿のほむらが来た。

『ひ…、ひどいよ。なんにも殺さなくても…』

『…あなたは…なんであなたは…そうやって自分を犠牲にして…、役に立たないとか、意味がないとか、勝手に自分を粗末にしないで、あなたを大切にする人のことを考えて…、いい加減にしてよ！あなたを失えば、悲しむ人がいるってどうしてそれに気づかないの？あなたを守ろうとした人はどうなるの！？』

この時、ほむらが泣いていると遊星は気づいていた。それとともにほむらの言っていることに疑問を持った。悲しむ人？守ろうとした人？どうしてほむらの言葉からそんなことが出てきたのか…。するとまどかが…

『私たちは…どこかで会ったことあるの…？』

やはりまどかも気づいていたかつと遊星は思った。ほむらの言葉からして、まどかとほむらはどこかで知り合っている…。そう思えてきたからだ。そしてまどかはまたさやかを捜しにどこかへいった。遊星は疑問に思ってたことをほむらに聞くため彼女のところへいった。

「ほむら…」

「…遊星…」

「どうしてあんなことまでしてまどかを魔法少女にさせないんだ？それに、お前とまどかはどこかで知りあったのか？」

「…それは…」

「無駄な事だつて知ってるくせに、こりないんだな、君も」

「!？」

どこから声が聞こえて遊星は驚いた。それも聞いたことがある声だからだ。それはさつき死んだはずのキュウベえだった。声の方を見ると遊星は驚愕した。そこにキュウベえがいたから

「どういうことだ…！？キュウベえは…」

「無意味に潰されるのは困るんだよね。勿体無いじゃないか」

そしてキュウベえはベンチにあるキュウベえの死骸を食べた。

「君に二度殺されるのは二度目だけど、おかげで攻撃の特性が見えてきたよ。時間操作の魔術だろう？さっきのは」

「二度目…？前にほむらに殺されたのか？」

「まあね、君とであう前にね。それと、君はこの時間軸の人間じゃないね」

キュウベえの言ってることに遊星は話がついていけなかった。ほむらは以前にまどかに出会った、そしてこの時間軸の人間じゃない。一体それはどういうことなのか…

「…お前のたくらみもすべて知っている」

「なるほどね、そうまでして鹿目まどかの運命を変えたいのかい？」

「ええ、絶対にお前の思い通りにはさせない…キユウベえ…いいえ、インキュベーター!」

(インキュベーター…それがキユウベえの本当の名前…)

そして、クロウと杏子はやっとの思いでさやかを見つけた。

「見つけたぜ、さやか、帰ろうぜ。まどかも遊星も心配してたんだぜ」

「…」

「あんたさあ、いつまで強情張ってる気?」

「…悪いね、手間かけさせちゃって…」

「なんだよ、らしくねーじゃんか…」

「うん、別にもう、どうしてもよくなっちゃったからね。結局、私は一体何が大切で何を守ろうとしてたのかなにもかもわかんなくなっちゃって…」

すると、さやかの手元には黒く染めきったソウルジエムがあった。

「さやか、そのソウルジエム…!」

「希望と絶望のバランスは差し引きゼロだって話、今でもわかるよ。確かにあたしは何人か救いもしたけど、その分心には恨みや妬みが

溜まって、一番大切な友達も傷つけた…誰か幸せを祈った分、他の誰かを呪わずに入られない」

「さやか、あんたまさか…！」

「あたしたち魔法少女はそういう仕組みだったんだね…。あたしってほんとバカ」

さやかの涙の粒がソウルジェムに当たった瞬間、さやかのソウルジェムは破裂し、グリーンフィールドが出来上がってしまった。その衝撃にクロウと杏子は吹っ飛ばされていった。

「うわあああ…！」

「く…！さやかあああああ…！」

…この国では、成長途中の女の子のことを『少女』って呼ぶんだろ？…だったら、やがて魔女になる君たちは魔法少女と呼ぶべきだね。

続く

第二十二話（後書き）

やはり、自分でも区切りがついていませなので再開することになりました！（おい！）

第二十三話（前書き）

5D・sの最終回よかった——！！遊星とアキのやり取り…あれはファン狙いなのか！？あ

第二十三話

クロウと杏子の目の前に人魚の魔女が立ちふさがる。急いで、クロウはデュエルディスクにデッキをセットし、5枚のカードを引き、杏子は魔法少女に変身した。

「くそ、さやか！【BF - 蒼炎のシュラ】を召喚！いけ、さやかを助けるんだ！」

【BF - 蒼炎のシュラ】がさやかを救い、クロウの元へ戻った。

「なんなんだ！？てめえさやかに何しやがった！？」

その時、魔女のうめき声が聞こえた。その声はクロウには聞き覚えあった。さやかの声だと…。苦しんでいるさやかの声だった…。

「これって、さやかの声じゃねえのか…！？」

「え！？」

「さがつて」

すると、今度はほむらが来た。その瞬間、魔女の目の前に爆弾がでてきて、爆発した。その後、クロウと杏子の目の前に来た。

「つかまって」

「なに！？」

「早く！」

言われたとおりにクロウとさやかはほむらの手をつかんだ。そして、
なにも起こらない様に魔女の動きが止まった。

「なんだこれ？どうなってんだ？」

「私から手を離すとあなたたちの時間は止まってしまふ。気をつけ
て」

そのまま、杏子はさやかを抱きかかえ、ほむらとクロウと杏子は一
緒に逃げ出した。

「どうなってるんだ！？あの魔女はなんなんだ！？」

「かつて、美樹さやかのものよ……」

「てことは、あれはさやかだって言うのか！？」

「ええ」

「このまま逃げるってのか？」

「いやならそのお荷物を置いて、あの魔女を殺しましょう」

「ふざけるな！」

「今のあなたたちは足手まといにしかない」

そして3人は出口にたどり着き、結界から脱出した。

その頃、まどかは線路の上をただただ歩いていた。その後ろから遊星が来た。

「まどか、さやかは見つかったのか？」

「いいえ…」

「遊星ー！」

その後、ジャックとマミも来た。

「ジャック、マミ」

「美樹さんは…？」

「いや…」

「くそ！さやかはどこにいったんだ…」

目の前からクロウ、ほむら、そしてお姫様抱っこでさやかを運んでる杏子が来た。

「クロウ！…さやかは…どうしたんだ！？」

「…すまねえ…、遊星…さやかは…」

「ねえ、さやかちゃんのソウルジェムは…！？」

「彼女のソウルジェムは、グリーンフィードとなり、魔女となって消

滅した」

ほむらの発言に遊星、ジャック、まどか、マミが驚愕した。

「なん…だと…！？本当なのか！？クロウ！」

「…」

ジャックの質問にクロウはただ黙っていた。さやかがグリーンフィードとなり、魔女となった…。この状況でほむらは全部本当のことを話す。

「うそ…だよね…」

「事実よ。それがソウルジェムの最後の秘密。にぎりきつた後、ソウルジェムはグリーンフィードとなり、やがて魔女となる」

「そんな…じゃあ、さやかは…」

「あの子は誰かを救った分だけ、誰かをたたりながら生きていく」

杏子はさやかを下ろし、ほむらの胸ぐらをつかんだ。

「てめえは…何様のつもりだ…？なんでそんな得意げにしゃべってられるんだ…？コイツはさやかの親友なんだぞ…！」

まどかは涙を流していた。自分の親友がこんな姿になってしまったことに…。そしてマミも遊星もジャックも悲しんだ。

「今度こそ、理解できた？あなたの憧れてたものの正体。わざわざ

死体を持ってきた以上、扱いには気をつけて。後々厄介なことになるわ」

「てめえそれでも人間か!?!」

「ええ、もちろんそうよ。あなたも…」

「貴様!こんな大変なことをなぜそんなのんきに…!」

「やめろ、ジャック」

「クロウ!なぜとめるんだ!?!」

「そいつをやったところでさやかは元には戻りやしない…」

「クロウさんの言うとおりよ…。美樹さんは…」

「…」

そして、遊星は黙ってどこかへ行こうとする。それをジャックは止めた。

「遊星!お前、どこに行くんだ!?!」

「話したいやつがいるんだ」

「話したいやつだと!?!」

「今からそいつに会ってくる…」

遊星は闇の中に消えていった。ジャックとクロウはその後を追わなかった。

D・ホイールに乗り、遊星は暗い夜の中を走っていた。その後、D・ホイールから降りた。

「…僕を捜してたのかい？」

キュウベえがやってきた。遊星の話したいやつとはキュウベえのことだった。

「キュウベえ…いや、インキュベーター。お前は最初から知ってたのか？ああなることを…」

「もちろんだよ」

「なら…、なんで最初から教えなかったんだ！？おかげでさやかは魔女になっているんだぞ！お前はなんとも思わないのか！？」

「…遊星…、君はなにか勘違いしていないかい？彼女たちは自分の魂をささげてまで自分の願いをかなえたんだよ。その上で魔法少女になったんだ」

「お前はまどかやマミをあんな目にあわせるために…！魔法少女に誘い込んだのか！？」

「とんでもない、宇宙のエネルギーを得るためだよ。エントロピーって知ってるかい？あれと同じ仕組みだよ」

「ふざけるな！お前が全部教えてくれなかったから、さやかは…い

や、魔法少女になった、マミや杏子…、ほむらはみんなお前にだまされて魔法少女になったんだ!」

遊星の顔からしてみれば、怒りが込みあがっていた。キュウベえに對しての怒りが…。

「だますなんて…、君は…どうしてそこまでして…」

「まどかやさやか…、マミは俺の仲間だ! ジャックやクロウもそうだ、仲間をほっておけないんだ…」

「…君はさやかを救いたいのかい?」

「救える方法はあるのか?」

「僕にもわからない。でも君は赤き竜のシグナーだ。世界の運命を変えた君なら、きっとできるはずだ…」

「…そうか…」

そしてD・ホイールに乗り…

「さやかを救いに行くのかい?」

「…ああ…」

D・ホイールを走らせ、どこかへ行つた。さやかを捜しに…

続く

第二十三話（後書き）

少し遊星に感情移入しすぎたかな…

第二十四話（前書き）

遊星はさやかを救えることができるのか…

第二十四話

翌日、まどかはいつものとおり、学校にいていた。

「今日もさやかさん、お休みでしょうか？」

「…うん…」

「ここはお見舞いに行くべきでしょうか…？」

「…仁美ちゃん…あのね…」

（昨日と今日で、のんきに学校に言ってる場合かよ）

頭の中で杏子の声が聞こえた。

（ちょっと話がある。顔かしてくれる？）

「…まどかさん？」

「仁美ちゃん、ごめん！私も今日はお休みにするよ」

「あ…、ちよつと…！」

まどかはそのまま、学校に行かずに杏子のところへ行ってしまった。

その頃、遊星は昨日の夜からさやかを捜しにD・ホイールを走らせていた。そしてついに魔女の結界への扉を見つけた。

「ここだな…」

痣が痛々しく反応していた。おそらく、これはさやかだと思った。さやかを救うべく、D・ホイールを走らせ、結界の中へと進んでいった。

「待っていてくれ…さやか!」

そして、マミの家でも…

「遊星さん…」

「そういえば、遊星のやつ昨日から帰ってきてないな…」

「あいつ、話したいやつがいるとか言っていたが…」

すると、マミのソウルジェムはなにかに反応し、光出した。

「これは…、私、今日学校お休みにするわ…」

「え!?!」

そのまま急いで家を出て行った。

「あ…!…ジャック、俺たちも行くか…」

「…ああ!」

そして、まどかは杏子に会っていた。

「あの…、話つて…」

「美樹さやか、助けたいと思わない？」

その言葉を聞いてまどかは少し喜びそうになった。

「助けられるの…？」

「助けられないとしたらほっとくのか？」

それを聞いて黙り込んだ

「…おかしいなこいつちゃったね…、バカと思うかもしれないけど、あたしはね、それを助けられるかどうか、確かめるまであきらめたくない。あいつは魔女になっちゃったけれど、友達の声くらいは覚えてるかもしれない。それで人間の頃の記憶を取り戻せるかもしれない。それができるのはあんただ」

「…うまくいくかな…」

「わかんねーよ。わかんないからやるんだよ。遊星だっけ？あいつも可能性を信じて、どんな困難にも立ち向かったんだろ？」

「どうしてそれを…」

「昨日、さやかを助けに行く途中にクロウから色々聞いてるんだよ。遊星はどんな強敵でも仲間と共に戦い、奇跡を起こしてる。あいつにできるなら、あたしらもできるはずだよ。あたしとあんたで協力して…。最後に愛と友情が勝つストーリーがあるじゃん。あたし、そついうのに憧れて魔法少女になったんだよね。それをさやかは思

い出させてくれた。無理に誘いはしねえ。いやならここでやめても…」

「ううん、手伝う。手伝わせて欲しい…」

まどかは杏子に手を差し伸べて…

「私、鹿目まどか」

「…たくもつ、調子狂うよな。あたしは佐倉杏子。よろしくね」

まどかにうま。棒をあげた。

そして…、遊星は…

「あれが…変わり果てた…さやかの姿…！」

そこには魔女に変わったさやかの姿があった。周りにはバイオリンを弾いている使い魔がたくさんいた。

「いくぞ！【スピード・ワールド2】セット！」

遊星はライディング・デュエル専用のフィールド魔法、【スピード・ワールド2】を発動した。

すると結界は一本の道ができ、遊星はD・ホイールを走らせた。その後を魔女が追う。

「さやか！今お前を助けてやる！」

まどかと杏子はさやかを捜しに行っていた

「ほむらちゃんは…手伝ってくれないかな…？」

「いや、あいつは手伝ってくれないよ」

団子を食べながら言った。…どこかで買ったのだろうか…

「お互い1人じゃ、倒せない敵と戦うためにつるんでるだけさ。あと何日かすればこの町にワルブルギスの夜が来る」

「ワルブルギス…？」

「超ど級大物魔じゃさ。多分あたしもあいつも1人じゃ、倒せない」
会話をしているうちにさやかがいる結界に到着する。するともう誰かが通った痕跡があった。

「…誰だ？結界の中に入ってるやつは…」

「遊星さんよ…」

するとマミがここやってきた。

「「マミ(さん)」」

「昨日から帰ってきてないから心配して追ってきたけれど、遊星さんはすでに美樹さんと戦ってるわ」

「マミさん…」

「私も貴方たちと同じよ。一緒に美樹さんを救いに行きましょう」

「いいのか…？」

「遊星さんたちに教えられたのよ、仲間の大切さ…。美樹さんを寂しい思いなんてさせたくないもの」

「マミさん…」

「ねえ、そこに遊星がいるの？」

誰かが声をかけてきてまどかたちは振り向く。そこには赤いバイクに乗った1人の女性がいた。

「あなたは…？」

続く

第二十四話（後書き）

遅れを取り戻すために今日、明日は2回更新します。

お知らせ

いきなりですが、更新を停止します。

理由は他の小説で忙しいのと、まどかの異常なチートです。

最終回見たとき、あそこで遊星をどう活躍させればいいんだ…？と思いました。

あの現状だと、遊星の影が薄くなるのとまどかの力は遊星を超えるどころか遊星でさえも届かぬ領域にたってしまったところです（自分から見た感じですが…）。

最終回での遊星をどう考えても活躍できる箇所が思いつきませんでした…

勝手ながら出すみません…。

今までのご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4574q/>

遊戯王5D's マギカ

2011年9月19日20時48分発行